年報

名古屋大学大学院人文学研究科 教育研究推進室

目 次

名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室前期幹事 小川翔太 i

巻頭言

I	教育	研究推進室の)活動報告	1
	1. 5	大学院生支援	事業	
	1–1	学会発表奨励	动金一覧(2024年度) 1	
	1–2	調査奨励金-	-覧(2024年度) 1	
	1–3	調査奨励金幸	最告書(2024年度) 2	
		安藤理紗	ヴィジュアル系バンドの衰退原因調査 ——インタビューを通した質的側面による分析 2	
		古木龍太郎	愛知県の大学紛争に関して――機関誌の調査・分析から 5	
		堀口朝望	フランソワ・ブーシェの神話画《アウロラとケファロス》における基礎調査 ——国外所蔵の作品との比較と一次資料収集のため 7	
		金 旭	帰郷した起業女性を対象としたライフストーリー調査から ——中国の都市化が農村に与えた影響についての考察 11	
		駒井祐香	寺社縁起にまつわる祭礼と伝承、堕地獄説流布の系譜に関する探究 13	
		尾﨑梨花	19世紀における知識人と学知――「知」の創成から政治参与へ 15	
		片 鐘煥	遠藤周作文学における長崎の実地調査 18	
		塩野敬子	戦後超流派批評雑誌 2 誌を中心とした記事動向調査 19	
		時野加奈子	技能実習制度の過渡期における送り出し国の日本語教育の調査プロジェクト	22
	2. 暑	教育研究推進:	室主催の行事(FD・ワークショップ・その他)	
	2-1	FD・ワーク	ショップ・その他一覧(2024年度) 24	
	2-2	自己紹介の会	☆開催一覧(2024年度) 24	
	2–3	FD 報告		
		人文系研究者	音にとっての産官学連携 ミギー ディラン・小川翔太 25	
II	人文	学研究科の教	文育・研究活動 ····································	30
	1. 🛊	教員の著書		
	1–1	出版著書一覧	〔(2024年度) 30	
	1-2	受賞著書一覽	⑤ (2024年度) 30	

年報2024	名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室	(2025)	
--------	-----------------------	--------	--

	1–3	教員の自著紹介(氏名 ABC 順)			
		伊藤伸幸	Investigaciones arqueológicas en el área, de Tazumal dela zona arqueológica de Chalchuapa : proyecto arqueológico de El Salvador. Editorial Universidad Tecnológica de El Salvado. 31		
		伊藤早苗	Royal Image and Political Thinking in the Letters of Assurbanipal. State Archives of Assyria Studies vol. 34, Penn State University Press for Neo-Assyrian Text Corpus Project. 33		
		河西秀哉	『皇室とメディア――「権威」と「消費」をめぐる一五〇年史』新潮選書 34		
		中村靖子	『ことば×データサイエンス』春風社(中村靖子・鄭弯弯編著) 36		
	2. =	各種報告			
	2–1	大学院教育の	の国際化に向けて		
		国際化推進等	室活動報告(グリブ ディーナ) 37		
		令和6年度/	人文学研究科研究プロジェクト 真福寺大須文庫のアーカイヴ創成プロジェクト ——今後の宗教遺産テクスト学の発展に向けて(郭 佳寧) 39		
	2-2	人文学とデー	ータサイエンス		
		連続ワークミ	ショップ データに基づいた統計・機械学習モデルの基礎と応用(鄭 弯弯) 40		
III	各種	データ	41		

巻頭言

名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室から、「『年報』2024」をお届けいたします。推進室は、2017年(平成19)年4月に研究科が発足して以来、大学院生に対する支援や教員の教育研究活動の活性化に向けて旧文学部研究科で行っていた取り組みを継承し、公正な尺度に基づく現状の評価、検証、改善に欠かせない各種データの収集ならびに公開を新たに任務に加えて活動してきました。昨年度は、パンデミックの収束から数年を経て、その間大きく変わった教育・研究環境に合わせて推進室の活動も見直す模索が続いた一年でした。

大学院生支援では、従来「フィールド調査プロジェクト」と「研究発表支援事業」として公募していた研究助成を、新たに「調査奨励金」「学会発表奨励金」と改めました。その狙いは、当初想定していたフィールド調査や史資料の収集だけでなく謝金支払いを伴う実験や調査も行われている実態への対応、また、部分助成も含めた幅広い採択を可能にすることで限られた予算の有効活用を図ることです。渡航費の高騰や簡易化するオンライン調査の利用範囲など、大学院生が調査活動に際して考えるべき問題は他にも多く、推進室でも引き続き対策を検討したいと思います。

教育研究活動の活性化では、構成員の領域を超えたつながりを促す「自己紹介の会」で昨年度は新たに16名の教員に登壇いただきました。通算26回の開催を経て、とくに各教員の研究時間を確保する命題と両立した形でどのように継続するかが今後の課題です。また、推進室提案のFDでは、人文系研究における産官学連携をテーマに学外講演者を招聘しました。もともと教育環境の激変に際して教員が自主的・自律的にノウハウを共有する場として発展してきたFDの本来の姿も念頭に置いて、今後もアクチュアルな問題を扱う企画として続けたいと思います。

『年報』を通して人文学研究科の教育研究活動状況を広く皆様に知っていただくことで、今後の さらなる発展に向けたご意見を仰ぐことができれば幸いです。

2025年8月2日

名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室前期幹事 小川翔太

Ⅰ 教育研究推進室の活動報告

1. 大学院生支援事業

1-1 学会発表奨励金一覧(2024年度)

氏 名 (分野・専門) 学年	発表題目(使用言語)	研究集会の名称 開催地(都市名・国名)	研究集会会期 (本人発表日)
	該当者な	: L	

1-2 調査奨励金一覧 (2024年度)

氏 名 (分野・専門) 課程・学年	プロジェクト題目	調査訪問機関(所在地)	調査月
安藤 理紗 (メディア文化社会論)・ M2	「化社会論」・「一インタビューを通した質的側面によ」謝金助成		2024年7、 10~12月
古木 龍太郎 (日本史学)・M2	愛知県の大学紛争に関して―機関誌の 調査・分析から	東京大学経済学部 (文京区) · 国立国会図 書館 (千代田区)	2024年 11~12月
堀口 朝望 (美学美術史学)・M2	フランソワ・ブーシェの神話画《アウロラとケファロス》における基礎調査 一国外所蔵の作品との比較と一次資料収集のため	ウォーレスコレクション・ナショナルギャラリー・ウォーバーグ研究所 (ロンドン) 以上イギリス 国立公文書館・ルーブル美術館・オルセー美術館・ポンピドゥーセンター (パリ)・ナンシー美術館 (ナンシー)・ヴェルサイユ宮殿 (イヴリーヌ県) 以上フランス	2024年10月
金 旭 (文化動態学)・M2	帰郷した起業女性を対象としたライフ ストーリー調査から―中国の都市化が 農村に与えた影響についての考察	成都市図書館・四川佰闊商貿有限公司など 宜賓市内の企業・健康宝貝母嬰店など長寧 県内の企業(中国)	2024年 6~7月
駒井 祐香 (文化人類学)・M2	寺社縁起にまつわる祭礼と伝承、堕地 獄説流布の系譜に関する探究	福正寺(栃木市)・広済寺(千葉県横芝光町)	2024年 7~8月
尾﨑 梨花 (日本史学)・M2			2024年 8 月
片 鐘煥 (日本文化学)・D2	遠藤周作文学における長崎の実地調査	福岡市博物館・佐賀県立博物館(佐賀市)・ 遠藤周作文学館(長崎市)	2025年 3 月
塩野 敬子 (日本文化学)・D1	戦後超流派批評雑誌 2 誌を中心とした 記事動向調査	国立国会図書館(千代田区)·日本近代文 学館(目黒区)·麗澤大学図書館(千葉県 柏市)	2024年 9、11月
時野 加奈子 (国際・地域共生促進コー ス)・M2	技能実習制度の過渡期における送り出 し国の日本語教育の調査プロジェクト	Vocational School No. 18 (日本語研修センター); Trung tâm đào tạo tiếng Nhật (日本語研修センター); Indochaina Plaza Hanoi; Thai/ Soc Son の地区の調査協力者の実家(ハノイ、ベトナム)	2024年10月

1-3 調査奨励金報告書(2024年度)

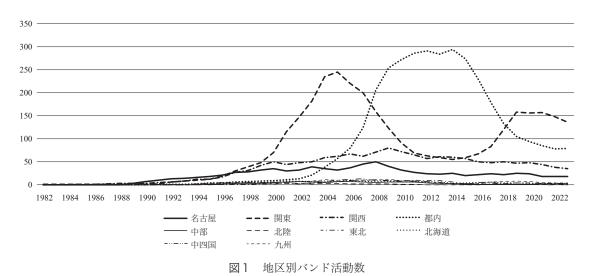
※執筆者の学年は2024年度のもの

ヴィジュアル系バンドの衰退原因調査――インタビューを通した質的側面による分析

安藤理紗 メディア文化社会論分野・専門 博士前期課程2年

はじめに 本研究は「量的分析で明らかになったヴィジュアル系バンドの衰退原因調査―インタビューを 通した質的側面による分析―」を題目として、2024年度「学位論文のための研究奨励金」より謝金補助を 受け、ヴィジュアル系ロック音楽に関わる関係者へのインタビュー調査を実施したものである。なお、本調 査は名古屋大学人文学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けた上で遂行された。

調査の目的 本調査は、2024年3月に筆者が院生論集として発表した「名古屋におけるヴィジュアル系 文化の衰退と今後の展望」に基づいている。同論文においては、ヴィジュアル系ロック音楽が日本で誕生し た1980年代後半から現在に至るまでの活動バンド数および解散バンド数の推移を図示し、その変遷を分析 した (安藤 2024: 226)。



2000年代初頭には、ヴィジュアル系バンドが海外でのライブツアーを展開し、国外進出を図る動きが見 られた。しかし、図1に示すように、関東地域では2005年前後、東京都内では2013年前後をピークとして 活動バンド数が減少傾向にある。現在に至るまでの推移を活動バンド数の観点から分析すると、衰退の傾向 が明確に見て取れる。本調査では、このような変遷を踏まえ、ヴィジュアル系業界関係者へのインタビュー を通じて、彼らの実体験や現状認識、衰退の要因として挙げられる点についての意見を収集した。多様な立 場の関係者からの証言をもとに、多角的な考察を行うことを目的とした。

調査の方法 本調査では、ヴィジュアル系業界に携わる関係者へのインタビューを実施した。対象者はバ ンドマンをはじめ、雑誌編集者、プロデューサー、作曲家、ウェブサイト運営者など、多岐にわたる。イン タビュアーの多くが東京や大阪に居住しており、名古屋以外で活動しているため、基本的にオンライン会議 ツール「Zoom」を用いてインタビューを行った。Zoom を利用する際にはインタビュー内容の録音・録画に ついて事前に同意書を取得し、倫理的配慮を徹底した。インタビュー後は、録音データを繰り返し聞き直し、 発言内容の確認を行った。特に、疑義が生じた場合や追加の確認が必要な場合には、電子メールを通じて対 象者に連絡を取り、正確な情報を確保するよう努めた。ヴィジュアル系業界においては、独自の言い回しや 歴史的背景を前提とした会話が行われる傾向がある。そのため、インタビュー中は可能な限り発言内容を繰 り返し確認し、齟齬が生じないよう細心の注意を払った。

調査の結果 本調査の結果、ヴィジュアル系業界関係者の多くが、業界全体の衰退を肌で感じていること が明らかとなった。衰退の要因として、以下のような点が挙げられた。

1. 多様なサブカルチャーの台頭と音楽制作環境の変化

近年、ヴィジュアル系ロック音楽に限らず、多様なサブカルチャーが台頭し、リスナーの選択肢が飛躍的 に増加している。また、デジタル技術の発展により、音楽制作の敷居が大幅に低下し、個人でも容易に楽曲 を制作・発表できる環境が整っている。特に、デジタルツールの多くは低コストで導入が可能であり、制作 コストや時間を要していた従来のヴィジュアル系ロック音楽のあり方との間に乖離が生じつつある。このよ うな状況は、ヴィジュアル系の音楽スタイルや活動形態が現代の音楽シーンの潮流と必ずしも合致しない要 因の一つと考えられる。

2. ヴィジュアル系バンドの変容とその課題

従来のヴィジュアル系バンドは、カリスマ性や神秘性を持つ「手の届かない存在」としてのイメージを構 築し、ファンとの一定の距離を保つことで独自の魅力を形成していた。しかし、SNS の普及やファンとの 交流機会の増加(例:撮影会の開催)により、アーティストとファンの距離が大幅に縮まり従来のコンセプ トとの間に齟齬が生じているとの指摘がある。さらに、日本国内における少子高齢化の進行に伴い、そもそ も音楽リスナーの総数が減少している中で、「ヴィジュアル系バンドに憧れた者が新たにヴィジュアル系バ ンドを結成する」という縮小再生産のサイクルが繰り返されている。このような状況が、業界の持続的な発 展を妨げる要因の一つとなっている可能性がある。

3. メンズ地下アイドルへの人材流出

ヴィジュアル系バンドに所属していたアーティストやスタッフが、メンズ地下アイドル業界へ流出してい ることも業界縮小の一因となっている。これらの現象は、業界内部にいる関係者でなければ把握しにくい要 素であり、今回のインタビューを通じて初めて明確になった点である。

上述した衰退要因を踏まえ、今後のヴィジュアル系音楽業界の発展に向けた方策として、いくつかの提案 がなされている。その一つとして、日本語話者以外のリスナーを対象とした英語コンテンツの強化が挙げら れる。具体的には、歌詞に英語を積極的に取り入れる、海外ファン向けのプロモーション活動を強化するな どの取り組みが求められる。また、歌詞の内容に関しても、国際的な視点を意識したテーマ設定や表現の工 夫が必要であると考えられる。さらに、縮小再生産のサイクルから脱却し、業界全体の持続的な発展を促す ためには、バンド自身が音楽の本格的な基盤を築き、オリジナリティのある楽曲を制作していくことが不可 欠であるとの意見もあった。従来のヴィジュアル系の音楽スタイルに依存するのではなく、新たな音楽的ア プローチを模索し、独自性を確立することが求められる。加えて、「ヴィジュアル系」というマイノリティ な音楽ジャンルだからこそ、固定化された「ヴィジュアル系らしさ」のイメージを打破し、意外性を持たせ た新たなファッションや日常に寄り添う要素を取り入れることが、新規ファンの獲得につながる可能性があ る。また、ヴィジュアル系を広く大衆に届けるためには、「お茶の間に届くバンド」、すなわち一般層にも訴 求できるアーティストの登場が起爆剤となる可能性も指摘されている。こうした戦略を通じて、ヴィジュア ル系音楽の新たな発展の道筋が示されると考えられる。

これらの知見は、筆者が執筆した「名古屋におけるヴィジュアル系文化の衰退と今後の展望」では扱いき れなかった内部事情を補完するものであり、極めて興味深いものであった。

調査の難点と改善方法 本調査の実施において、最も大きな課題となったのはインタビュー対象者の確保 であった。公式ホームページ等を通じて関係者に連絡を取ったものの、返信が得られないケースが多かった。 そのため、一度インタビューを実施した対象者に対し、追加の紹介を依頼する手法を採用したが、それでも 新たな対象者にたどり着くことは容易ではなかった。このような状況を踏まえ、今後はより積極的に関係者

とのネットワークを構築し、事前に接触を図ることが重要であると考えられる。また、事務所に所属するバ ンドマンの場合、マネージャーから発言を制限されることが多く、インタビューの実施が困難であった。一 方で、フリーで活動するバンドマンや、活動開始から数年以内のアーティストは比較的インタビューに応じ やすい傾向が見られた。

調査の総括 本調査の実施にあたり、研究奨励金の補助がなかったとしても、筆者としては自主的に研究 を継続する意向であった。そのため、今回の助成金の支援を受けたことにより、より円滑に調査を進めるこ とができた点に深く感謝している。現在、インタビュー対象者の紹介は継続的に広がりを見せており、今後 も質問の精度を向上させながら、より多くの関係者と対話を重ね、新たな研究課題の発見につなげていきた いと考えている。本研究の遂行にあたり、主指導教員である McGee Dylan 准教授をはじめ、多くのインタ ビュー協力者の支援を受けたことに、心より感謝申し上げる。

参考文献

安藤理紗 (2024)「名古屋におけるヴィジュアル系文化の衰退と今後の展望」『名古屋大学人文学フォーラム』7号、pp. 219-234.

愛知県の大学紛争に関して――機関誌の調査・分析から

日本史学分野・専門 博士前期課程2年 古木龍太郎

はじめに 1968年前後、ベトナム反戦運動や資本主義体制への批判を背景とした社会運動が世界各地で 同時多発的に展開された。日本においても、ベ平連(ベトナムに平和を!市民連合)によるベトナム反戦運 動や、全学共闘会議(全共闘)による大学内外での活動が展開した。これらの運動は、自身の生き方を模索 する運動として、世界的な潮流の一環として位置づけられてきた¹⁾。このうち全共闘による運動は、1968年 の日本大学や東京大学での運動に代表され、彼らは日本共産党と関わりのある日本民主青年同盟(民青)の 学生や大学当局と激しく衝突した。この動きは愛知県にも波及し、1969年2月に名古屋工業大学における 運動を皮切りに、県内各地の大学で大学紛争が発生した。

修士論文では、愛知県で発生した大学紛争とそれに至る学生運動の実態および関連する地域社会での運動 に検討を加えた。そのうち、本助成金を利用し、東京に所在する機関に所蔵されている史料から中央と地方 の運動の関係性を探る調査を行った。この調査は、地方の運動が中央の指導をどの程度踏襲し、さらに独自 の発展を遂げたのかを解明するための基礎作業と位置づけられる。また、公安が作成した文献も収集し、こ の史料を研究にどう利用できるのかも検討した。

調査概要・日程 ①東京大学経済学図書館・経済学部資料室(訪問日:2024年11月19日)および、②国 立国会図書館東京本館(訪問日:2024年12月5・6日)に所蔵されている各種機関誌を調査した。調査の 対象とした史料は、事前に文献調査や先行研究での使用を確認したうえで選定し、なかでも愛知県に関連す る記述が存在する可能性の高いものを特に対象とした。また、史料を収集・閲覧する際は、物事を多角的な 視点から事象を捉えるよう心がけた。

調査内容・結果 【①東京大学経済学図書館・経済学部資料室】東京大学では、70年安保に向けた日本の 新左翼諸党派の労働運動に関する史料群を閲覧した。史料の閲覧にあたっては、事前にメールで閲覧申請を 行い、史料の保存状態を考慮しながら写真撮影による記録を行った。主に革マル派が発行した史料を中心に 調査し、学生と労働者の接点を探った。閲覧した『闘う全学連』、『ケルン』および『共産主義者』から、愛 知大学の学生が浜松において国鉄労働者と静岡大学の学生と協働して活動を行っていた事例を確認した。 1970年9月発行の『ケルン』には、1970年の日本国有鉄道浜松機関区での合理化反対闘争に、愛知大学と 静岡大学の学生がビラ配りやデモ行進などの支援活動を度々行っていたことが報告されている²⁾。この事例 は地方における新左翼系による労学連帯の興味深い事例として注目される。

【②国立国会図書館東京本館】 国立国会図書館では、1967年から1972年までの約5年間分の各種機関誌 を集中的に調査し、愛知県内の運動に関連する記事を分析した。特に愛知県内の大学紛争が最も激化した時 期である1969年2月から1970年3月に焦点を当てた。閲覧した史料は、『民青新聞』、『全国学生新聞』、『生 学連新聞』、『世界学生新聞』、『日本学生新聞』および『ザーリャ』である。これらの機関誌の記述から、愛 知県での運動が中央の指導および、全国的な連帯のもとで活動していることが確認できた。

たとえば1969年11月の『生学連新聞』(生長の家学生会全国総連合発行)の記述から、左翼系の運動に対 抗した新右翼の民族派の運動体として民族派全学連の準備が進められていたことがわかる³⁾。1969年発行の

¹⁾ 安藤丈将「第11章 日本 全共闘とベ平連」(『グローバル・ヒストリーとしての「一九六八年」』ミネルヴァ書房、2015年、 304頁)。

²⁾ 国鉄委員会「「完全共闘」の美名にかくれた反合闘争の条件集約に抗し闘う」(『ケルン』72号、革共同・革命的マルクス 主義派国鉄委員会、1970年、87頁)。

³⁾ 生長の家学生会全国総連合『生学連新聞』16号、1969年11月1日1面。

『中京大学学生新聞』では、学内で民族派組織を作るきっかけとして東京での大会が報じられたが⁴)、その具 体的な内容までは確認できなかった。今回の史料調査で結成のきっかけとなる運動指針を発見し、中京大学 内での活動を史料にもとづいて証明した。

また、公安史料として『内外情勢の回顧と展望』(公安調査庁)や『旬報学生青年運動』(日本教育協会) を閲覧し、公安当局による学生運動の把握や分析方法を検討した。公安史料は、情報収集の目的で作成され たという経緯や一般的に公開されていないといったアクセスのしにくさから、従来の学生運動の研究におい て積極的に活用されてこなかった。しかし、今回の調査から、適切な史料批判を行うことで、学生運動や社 会運動の研究において公安史料が有効な研究素材となりうることを確認できた。たとえば金城学院大学での 学生運動について、一般紙や学校史では漠然と新左翼としか記載されていなかったが、公安史料を参照する ことで中核派と特定することができた⁵⁾。さらに、当時の新聞に書かれていた主張の内容と中央の史料を参 照すると、その活動内容や方針が中央組織に倣ったものであったことも判明した。

公安史料の学術的利用にあたっては、情報収集の目的で作成されたことを踏まえた批判的検討、他の一次 史料との照合による信頼性の検証、記述の偏りや監視対象の選定基準への注意などが重要である。今後は他 の社会運動研究における公安史料の利用例も参考にしながら、批判的検討の枠組みを構築していく予定であ る。

調査の成果と今後の展望 本調査によって、愛知県の大学紛争と学生運動が中央の動向と密接に連動しな がら展開していたことが明らかとなった。特に新左翼系の労学連帯や右派系学生組織の動きについての新た な知見を得ることができた。

今後の研究では、中央と地方の関係性についてより詳細な分析を行い、愛知県内の複数大学における運動 の共通点と相違点を検討していきたい。そして、公安史料と当事者の証言や回想を照らし合わせることで、 より立体的な運動像を構築することに注力したい。

調査を振り返って 最後に、本奨励金を使用した調査の感想を述べておきたい。今回の調査は、交通費の 支援のみであったため、宿泊費の補助がなかった。そのため、宿泊費を抑えるために南町田グランベリーパー ク駅近くの宿泊施設(東京都町田市、ほぼ神奈川県)を選択したが、調査先から電車で約1時間の距離があ り、通勤や帰宅ラッシュに巻き込まれるなど移動がストレスとなり、調査効率に影響した。これらのことは、 2025年2月の成果報告会で宿泊費補助の必要性を伝えたほか、他者からの同様の意見もあったことから、 2025年度からは交通費に加えて宿泊費補助も実現した。

国立国会図書館の所蔵資料のデジタル化は進んでいるものの、今回調査した機関誌や新左翼関係史料の多 くは未だデジタル化されておらず、直接の訪問が必要不可欠であった。地方在住の研究者にとって、こうし た貴重史料へのアクセスには経済的または時間的コストがかかる。研究の機会均等と地域間格差の是正のた めにも、さらなる史料のデジタル化の推進と研究支援体制の強化が望まれる。

⁴⁾ 中京大学学生協議会『中京大学学生新聞』創刊号、1969年9月10日1面。

⁵⁾ 日本教育協会『旬報学生青年運動』292号、1970年9月15日32頁。

フランソワ・ブーシェの神話画《アウロラとケファロス》における基礎調査 ――国外所蔵の作品との比較と一次資料収集のため

美学美術史学分野・専門 博士前期課程2年

はじめに フランソワ・ブーシェ (François Boucher, 1703-70) は、フランス・ロココ美術を代表する画家 である。国王ルイ15世時代の歴史画家として名声を博しながら、神話画、牧歌的絵画(パストラル)、風景 画など、多様なジャンルの絵画を数多く制作し、タピスリー、舞台装置、磁器等デザインも行うなど八面六 臂の活動をした。本フィールド調査(以下、「本調査」)は筆者の修士論文に係るものであり、同画家に帰属 された油彩画による神話画《アウロラとケファロス》(Ananoff, 1976, no. 291, 以下「本作」) の関連作品の調 査である。本作はブーシェの作として帰属された大判の神話画で高い完成度であるにも関わらず、制作背景 等不明な点の多い異色の作品である。したがって本調査は、本作と同主題あるいは制作上類似する作品の比 較のための実見調査および作品に付随する資料閲覧を目的として行った。調査にあたり、人文学研究科教育 研究推進室から渡航費20万円(区分:アジア圏以外)の支給を受け、令和6年10月19日から同月31日まで の期間(移動含)、イギリスのロンドン、フランスのパリとナンシーへ赴き実施した。

調査の経緯 ブーシェ作として知られている本作は、画家による大判の神話画には珍しく18世紀当時の 制作背景や来歴がほぼ不詳であった。また、先行研究においてはブーシェの個人様式の観点から本作の制作 年代は1745年から50年代へ下る可能性が示唆されていた(木島監修, 2010;田中, 2022)。そこで発表者は 本調査の前に文献調査や本作の実見調査を行ったが、制作背景や来歴の手がかりとなる情報は先行研究で得 られるものに留まり、文献情報の参照や図版比較による調査に限界が感じられた。したがって同画家による 類似したサイズや構図、および同主題を描いた作品を直に参照し、画家の制作の手元に着目した比較が不可 欠であったことが本調査の経緯である。

修士論文との関係 令和6年12月25日に本学へ提出した修士論文の概要は以下の通りである。まず、本 作の帰属先であるブーシェの画業全体を概観した(第1章)。その上で、本作《アウロラとケファロス》の 文学的典拠であるオウィディウスの『変身物語』7巻「ケファロスとプロクリス」を描いた先行作例や主題 の伝統を概観し、声楽曲(カンタータ)と絡めた本作の独自性について論じた(第2章)。さらに、ブーシェ が他の神話画において実践したことが指摘されているロジェ・ド・ピール(Roger de Piles, 1635-1709)の絵 画理論の実践が本作にも見られることを主張した(第3章前半)(Crow, 1986)。17、18世紀の美術理論家で あり美術愛好家でもあったド・ピールは、17世紀における絵画の形而上的価値に重きを置く絵画理論を引 き継ぎつつ、色彩や陰影など周辺的議論に留め置かれていた要素の価値を強調した上で唯物的な全体調和の 実践を提唱した(島本, 1987)。以上のような同絵画理論および先行研究からブーシェの個人様式に通底す る「らしさ」の問題に取り組んだ(第3章後半)。本作においては、絵画を平面における装飾として捉えつ つ曲線を描くモチーフ配置や巧みな色彩調和が見られる1750年代のブーシェの個人様式に特徴的な洗練度 と比較すると異質であると言わざるを得ず、「ロココ」絵画の斜陽期に見られる折衷的な要素、すなわち古 典主義的な人物の量感や対比的な色彩といった表現が少なからず見られることを明らかにした。加えて近年 浮上した帰属問題についても言及し、本作品を取り巻く最新の研究状況を再確認した(第4章)。

本調査の成果は、修士論文の中で主に第3章の内容を補強するものとして機能している。ブーシェの絵画 を実際に熟覧および撮影を行うことによって、ド・ピールの絵画理論との照合や、画業の初期から1750年 代におけるブーシェの神話画に見られる造形的特質等を調査した。以下に、実際に行った調査の内容とその 成果を記していく。

調査方法 調査前半はイギリスのロンドンへ 3 日間赴き、ウォーレス・コレクション(Wallace Collection)





フランソワ・ブーシェ、《日の出》《日の入り》、1752-53年、油彩・カンヴァス、 318×261cm、ウォーレス・コレクション

とウォーバーグ研究所 (Warburg Institute) での調査を行った。ウォーレス・コレクションでは、ブーシェに よる傑作として位置付けられている油彩画の神話連作《日の出》《日の入り》(1752-53年、図1)の実見・ 細部の撮影調査を行った。同作は本作《アウロラとケファロス》との構図上の類似が指摘されるなど、本作 の制作年や個人様式の議論の中でひとつの鍵となっている作品である。また、ウォーバーグ研究所はロンド ン大学構内にある図像に関するアーカイヴが豊富な研究機関である。同所では、本作が典拠とする主題「ア ウロラとケファロス」の先行図像の存在を洗い出すための調査として、図像アーカイヴの閲覧を行った。

調査後半の7日間はフランスへ赴き、主に国立公文書館(オテル・ド・スービーズ)、ナンシー美術館、ルー ヴル美術館での調査を行った。ルーヴル美術館では、本作の制作時期の推定範囲に制作された大判の神話画 の実見・撮影およびそれらの作品に付随する文書資料の閲覧を行った。現在国立公文書館として機能するオ テル・ド・スービーズは、ブーシェ含む「1700年代の画家」の駆け出し期の室内装飾画を見ることができ る18世紀室内装飾の総本山的な館である。館内の戸口上部装飾画には、ブーシェによる本作との同主題作 品《アウロラとケファロス》(1739年頃、図2)が配置されていたため、実見・撮影調査を行った。同様の 方法で、ナンシー美術館が所蔵するブーシェ初期の記念碑的な神話画《アウロラとケファロス》(1733年、 図3) およびルーヴル美術館の《エウロパの略奪》(1747年、図4)、《ウルカヌスとヴィーナス》(1757年、 図5)も調査を行っている。ルーヴル美術館、ナンシー美術館では、文書アーカイヴにて作品に付随する文 書資料の閲覧を予約の上(前者は予約不要)行っている。

得られた成果 本調査によって得られた修士論文の成果は以下の2点である。まず、先行研究では、本作 《アウロラとケファロス》の制作年代が1750年代へと下る理由の一つに、「やや粗い筆致」が挙げられてい たが (田中, 2022)、実見調査から、ブーシェが初期の絵画においても描くモチーフによって筆使いを使い 分けており、後年の作品=筆致が粗い、というのは必ずしも一致しないことが窺えた、という点である。こ れは特に、ブーシェの画業の初期にあたる1733年制作の《アウロラとケファロス》(1733年、図3)の右下 に生える植物の筆致の粗さに顕著である(図6)。もう一つの成果としては、1730年代前半に制作されたブー シェの大判神話画と1750年代のそれにおけるド・ピールの理論の実践手法の違いである。ブーシェは画業 の後半において、人物の肉体の量感を押さえ細部を簡素化し、それぞれのモチーフを大気や水の質感に巻き 込むように描くこと、また、初期作品と異なり、絵画の中で周囲の環境に併せた相対的な色彩が考慮される ようになったことが見て取れた点である。近年、本作の帰属に関して新たな見解が浮上しているものの、本 作には当該調査で明らかになったブーシェの個人様式や構図上の工夫、特にド・ピールの理論の一端である



図2 フランソワ・ブーシェ、《アウロラとケファ ロス》、1739年頃、油彩・カンヴァス、162 ×169cm、フランス国立公文書館(筆者撮影)



図3 フランソワ・ブーシェ、《アウロラとケ ファロス》、1733年、油彩・カンヴァス、 250×175cm、ナンシー美術館(筆者撮影)



図4 フランソワ・ブーシェ《エウロパの略奪》、 1747年、油彩・カンヴァス、160.5×193.5 cm、ルーヴル美術館(筆者撮影)



図5 フランソワ・ブーシェ《ウルカヌスと ヴィーナス》、1757年、油彩・カンヴァス、 320×320cm、ルーヴル美術館(筆者撮影)



図6 図3部分(筆者撮影)

「凸面鏡」の実践が少なからず認められ、ブーシェと弟子を含む周辺画家との影響関係や、18世紀初期にお ける美術理論の世代的な広がりをも示すという点で非常に興味深いものであった。

加えて上記とは別に、ブーシェの作品を含む「ロココ絵画」が現代作家のインスピレーションとなり、新 たな作品が生み出された現場に立つことができたこともまた、今後の課題に着想を与える契機となったこと

も挙げておきたい。上述したウォーレス・コレクションでは、ブーシェの《日の出》《日の入り》の常設展 示と同じ空間に、企画展として現代作家フローラ・ユクノヴィチ (Flora Yukhnovich, 1990-) の油彩画が同 時に展示されていた。ユクノヴィチは、ブーシェの同連作に着想を得、画家の特質である軽快な色彩と平面 の装飾にアプローチするような装飾性を抽出することで現代的な表現に再構築する。このような近現代美術 におけるロココ絵画の受容と再解釈の一例は、筆者の修士論文以降の研究課題の構想に大きな刺激を与える ものであった。

調査における体験談 渡航前について:調査先の予約の要不要の確認、入館券や移動に係るチケットの購 入は出国前に済ませた。また、一般客(調査研究を目的としない来館者)の立ち入りが不可能な領域(美術 館であれば資料室等)にはメールや問い合わせフォームから連絡を取る必要がある場合がほとんど。但し、 ヨーロッパ諸国には「繋がらない権利」というものがあり、勤務時間外に受信したメールへの対応の仕方が 日本とは異なるという。メールの返信が無かった機関に対して、現地の勤務時間中に合わせて現地の言語で 連絡すると返信が返って来ることがあった。しかし、機関によっては上記の方法でメールを重ねて送っても 返信がない場合があり、ある程度見切りをつけることも必要と思われる。そして、初めて海外調査へ赴く場 合は、同行者がいると非常に安心感がある。事前にガイドブックを購入し、地下鉄やバスの路線図を見なが ら相談するなど、一緒にスケジュールを組み立てる時間も大変有意義であった。

調査中について:予め予備日を何日か作っておくことで不測の事態に慌てず対応できた。ルーヴル美術館 に訪れた際、曜日ごとに開閉するギャラリー(調査予定)の一角が、閉廊する所定の曜日以外の日に予告な く閉まっていたことがあった。調査の日程の後半に予備日を数日設けておくことで、美術館の再予約、再入 館の予定がすぐに立てられた。余分に費用がかかることも想定し、資金は余裕をもって調達しておくことも お勧めする。

最後に 本調査にあたり、名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室の柴田淑枝様、同推進室幹事兼 映像学研究室の小川翔太先生には渡航費の支給、調査準備、報告発表、本報告書に関して様々なご連絡やご 助言を頂きました。また、指導教員の杉山美耶子先生には調査計画書のご指導、推薦書の執筆、紹介状の発 行等大変お世話になりました。そして、渡航に際しご助言いただいた皆様、友人、家族に深く感謝を申し上 げ、報告書を締めくくらせていただきます。

Alexandre Ananoff et Daniel Wildenstein (1976) François Boucher, tom. 1, 2,: catalogue raisonné Lausanne & Paris.

Thomas Crow (1986) "La critique des Lumières dans l'art du dix-huitième siècle" (Jerôme Coignard, Trans.). Revue de l'Art, tom. 73, pp.

島本院 (1987)「ロジェ・ド・ピールと十八世紀の美術批評」『美学』38(1)、pp. 13-25.

木島俊介監修 (2010)『ヤマザキマザック美術館 [絵画・彫刻]』ヤマザキマザック美術館

田中優奈(2022)「フランソワ・ブーシェ《アウロラとケファロス》の制作背景」九州大学藝術学研究会(口頭発表概要).

帰郷した起業女性を対象としたライフストーリー調査から

一中国の都市化が農村に与えた影響についての考察

金旭 文化動態学分野・専門 博士前期課程2年

調査概要 中国では長らく農村戸籍と都市戸籍の区分により、人々の移動が厳しく制限されてきた。しかし、改革開放以降、この制限は徐々に緩和され、農村から都市へ出稼ぎに行く女性が増加した。都市に出た女性は、ある程度以前の家父長制から解放されたとする研究も存在するが、帰郷した女性たちは再び家父長制に取り込まれるという議論が強い。その背景には、農村社会の構造があまり変化していないと考えられたことがあるのではないかと推測される。しかし、都市での生活を通じて何らかの準備期間を経た女性たちは、農村に戻った後、一定の新しい生活スタイルを持ち込み、それを様々な形で挑戦するようになった。これにより、農村での新しい状況が少しずつ生まれるきっかけになっている可能性があると考えられる。

本プロジェクトでは、女性起業家に焦点を当て、出稼ぎ生活の実態、都市での経験が帰郷後の生活に与えた影響、そして農村の変化について、出稼ぎに出て再び帰郷した女性たち自身の証言を通じて明らかにした。この調査結果は、「帰郷農民工女性の起業活動によるジェンダー関係の変容―四川省の調査から―」をテーマとした修士論文の基盤となった。本報告は、2024年6月7日から7月17日までの期間に名古屋大学人文学研究科調査奨励金を受けて実施した、中国四川省Y市での聞き取り調査に基づいている。

調査方法 四川省は中国における出稼ぎ労働者の主要な出身地であり、改革開放以来、多くの農村労働者が都市部に出稼ぎに行っている。その中でも、2007年に政府主導で開始された「呼び戻しプロジェクト」は、帰郷した出稼ぎ労働者の起業活動を促進するための施策であり、2019年までに90万人以上の出稼ぎ者が帰郷し、起業を果たしていることから、四川省は代表的な事例といえる。

本調査は、知人や親戚からの紹介を通じて、雪だるま式に対象者を募り、最終的に21名の農村出稼ぎ経験者で、帰郷後に起業を果たした女性を対象とした。調査は2024年6月から7月の間に実施され、主に出稼ぎ生活、起業の経緯、そして起業による変化についての質問を行った。インタビューは対面またはオンラインビデオ通話で実施され、各インタビューの時間は約30分から2時間程度であった。

結果と考察 出稼ぎに関して、①多くの女性は出稼ぎの経験を消極的に捉える傾向がみられた。出稼ぎが影響を与えた場合もあるが、それは大都市という「外」の世界を見るための手段となり、彼女たちの表現からは、自己意識や人生観上の変化よりも、衛生観念やお金の使い方といった感覚上の変化にとどまったという認識が見られる。より多くの場合は、都市で生活していても必ずしも視野を広げることができるわけではなく、出稼ぎによる経済面のメリットも少ない経験であったとしている。②しかし、多くの女性が出稼ぎの経験を消極的に捉えていたにもかかわらず、彼女たちのその後の行動や選択を合わせて考えると、その経験が直接的または間接的に彼女たちの起業を促進し、起業への意欲や行動に一定の役割を果たしていたことが分かった。

起業による変化に関して、起業にともない、新たな性別役割分業の様式が形成されつつある。例えば、夫が家事を分担する事例が増加している。さらに夫婦ペアの経営、いわゆる「家族式の生産」においても、従来の「夫が経営者、妻が経営補助」が逆に転換し、「妻は経営者、夫が技術者」という新たな分業が現れている。彼女たちは自身の財産に対する支配権だけでなく、家族全体の財産や収入に対する支配権も拡大している。特に、大きな成功を成し遂げた女性たちは、起業で得た権力を使って家族や親戚に利益をもたらすとともに、問題解決能力を発揮することで一家の実質的な主導者としての地位を築くことが可能となっている。しかし、それでもなお、家族で「長男」と権力を争う場面では、一歩引かざるを得ない例がある。

これらの変化は、家族の領域での変化にとどまらず、地域社会にまで広がる可能性を秘めている。という

のは、女性起業者は「農村合作社」を設立することにより他の女性たちの起業活動を積極的に促進している からである。これにより、地域の女性たちの経済的自立や社会的地位の向上に寄与していると考えられる。 また、中には村のリーダーシップを担い、村民と行政との橋渡し役を果たしている女性もいることで、彼女 たちの行動や思想は村民の意思決定プロセスにも影響を与える可能性があると考えられる。

このように、都市に出た際にそれほど解放されなかった1980年代生まれのいわゆる「過渡期世代」やそ れ以前に生まれた「第一世代」の農民工女性たちは、都市で一定の準備期間を経た後、帰郷して起業という 新しい生活スタイルを築いた。このプロセスを通じて、農村における家父長制的な家族構造に少しずつ変化 が生じ、ジェンダー関係がより平等な方向に変化するきっかけとなったことが明らかになった。

所感 対象者を探す際には、予想外の困難がいくつか発生した。最初は、政府の関係機関を通じて対象者 を紹介してもらおうと試みたが、結果的に断られた。その後の手段として、SNS での募集や知人を通じた 紹介、さらに直接メールや訪問を行う方法が残った。しかし、募集条件が厳しかったため、SNS での募集 は効果的ではなく、実際には実施することができなかった。その一方で、知人の紹介によって何人かの対象 者を確保することができた。インタビュー対象者からさらに別の紹介をお願いしたいと思ったが、相手が忙 しいため、迷惑ではないかと心配し、最終的にはその依頼を諦めることにした。その後、直接メールや訪問 を試みたが、外来者に対する不信感が予想外の障害となった。仕方なく、以前インタビューを行った対象者 に再度連絡を取ってみたところ、意外にも熱心に協力してくれた。

ここで気づいたのは、「迷惑」と感じるかどうかは対象者側の感情に依存するということであった。自分 が何も言わなければ相手には伝わらないし、伝えること自体が必ずしも迷惑に繋がるわけではないというこ とを理解した。丁寧な説明が重要であるとあらためて心に刻んだ。

参考文献

山口真美 (2011)「中国四川の出稼ぎの里――変わらない風景、新しい風景」『アジ研ワールド・トレンド』193: 36-39. 李丹(2019)「現代中国における帰郷農民工の生活展開と起業活動に関する研究――家族の再編を視点とした江蘇・河北省農 村部の調査から」京都大学、博士論文.

金一虹 (2015)『中国新農村性別結構変遷研究——流動的父権』南京師範大学出版社.

李潔(2020)「流動的空間与女性角色的展演——鄉村女性労働力与伝統秩序的博弈」『北方民族大学学報』 3 期: 111-117.

寺社縁起にまつわる祭礼と伝承、堕地獄説流布の系譜に関する探究

文化人類学分野・専門 博士前期課程2年 駒井祐香

はじめに 本研究では、地獄にまつわる地域文化と住民との関わりや、それに基づく価値観の変化の解明 を目的とした。筆者は学部時代に日本中世にかけて生きた人々の死生観や、地獄観がどのようなものだった のかを説話集を中心に調査し、時代背景を交えた上で論じた。石田 (2013) では、中世の日本人は仏教に触 れたことで意識や思想に変化が生まれ、六道思想も受容したと唱えている。そして、地獄の世界観に基づい た儀礼が誕生し、各地の土着文化と交わった結果、慣習化した。その一例が筆者の調査地である千葉県匝瑳 郡横芝光町の広済寺で現存している「鬼来迎」である。鬼来迎に関する研究では、三隅(2017a, 2017b)や 生方(2000)によって国の重要無形民俗文化財に指定された経緯や儀礼内容について細やかな分析がなされ ている。しかし、今日まで儀礼が継続できているのは寺院のみならず、地域住民の協力の影響も少なくない。 これは、網野(1997)で取り上げた仏教と農業の結びつきの例からわかるように、仏教儀礼は人の手によっ て繋がれてきたことは明らかだ。また、松田(2015)で人間の地域間移動に言及している点からも、その他 にもその地を訪れた人々を介して伝播したことも儀礼が伝播した一因なのではと筆者は考えた。そこで、筆 者は地域住民の関与や人間の往来が与えた仏教儀礼への影響を明らかにするべく、関東地域の寺院で調査を 行った。

調査方法と内容 栃木県栃木市西方町にある福正寺、千葉県横芝光町にある広済寺の2カ寺にまつわる記 録を基に、調査を進めた。主に、『広済寺建立縁起』などの寺社縁起や、所在する地域や周辺市町村の地方誌、 寺院関係者への聞き取り調査を実施した。調査日程は、福正寺が7月15日側と16日似の2日間、広済寺が 8月16日 金である。聞き取り調査を行った結果、福正寺周辺には田畑が広がっているが、寺院の周辺住民 の中には農作物を生産することを主な生業とし、先祖代々福正寺の檀家である方が何人かいた (図1)。そ の方々によると、栃木市はかつて利根川支流が流れていることを活かした舟運交易が盛んであり、同じ利根 川支流沿いにある地域と交流していた。また、福正寺と関連のある支流沿いの地域にある寺院で福正寺のよ うな地獄絵を所有していることが分かった。しかし、実際に見てはおらず、類似性があるのかどうかは不明 なままである。

フィールド調査経験談 本奨励金に関する調査において、いくつかの問題が発生した。それぞれ欠員など 人的なことと気象など自然環境が元となったことが要因となり、調査内容や調査報告において変更を余儀な くされた。一つ目は、福正寺において、仏教儀礼を行う僧侶が当初は7人の予定だったが、当日体調不良に より1人欠員が出た。そのため、僧侶の動きや唱導が例年通りとはいかなかった。また、調査の前日に大雨 が降ったことにより、栃木市中心部で行われるはずだった秋祭りの日程が福正寺の儀礼実施日と重なった。



図1 福正寺周辺の様子(筆者撮影)



図2 福正寺の踊り念仏の様子 (筆者撮影)

その影響で例年より来場者が減少し、調査対象者が予定していた人数よりも減少した。二つ目は、広済寺の 調査において、台風 7 号が直撃し、公共交通機関が全休してしまい、町と福正寺の鬼来迎保存会は来場者の 安全を考慮し、2024年の開催は中止となってしまった。そのため、広済寺での調査自体ができず、福正寺 での変更もあったため、本奨励金申請時の研究計画からは遠く離れた調査となった。当然、調査サンプルも 比較できるほど得られなかった。

まとめ 広済寺の鬼来迎に関する地域住民らの関与は調査未実施などの影響もあり、当初立てていた研究 目標を明らかにすることはできなかった。しかし、福正寺では来場者たちに混じり、僧侶らが汗を流して真 剣に取り組む様子を間近で目にすることができ、衆生救済を唱えて続けてきた踊り念仏を地域住民がわざわ ざ足を運んで見に来たり、支援したりしてきた一因を垣間見ることができた(図2)。

網野善彦(1997)「中世における経済と宗教」『日本思想史学』29:5-12.

石田瑞麿(2013)『日本人と地獄』講談社.

生方徹夫(2000)『鬼来迎――日本唯一の地獄芝居』麗澤大学出版会.

松田睦彦(2015)「人の地域移動の日常性をめぐる民俗学史的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』199:11-34.

三隅治雄(2017a)「念仏講と念仏踊——房総の念仏芸(一)」『芸能の科学』11(6): 127-147.

三隅治雄(2017b)「来迎会と地獄芝居――房総の念仏芸 二」『芸能の科学』14(7): 1-43.

19世紀における知識人と学知―「知」の創成から政治参与へ

日本史学分野・専門 博士前期課程2年

はじめに 本研究は、幕末維新期に標榜された「公議」「公論」という言葉や状況がいかにして生まれた のかについて、近世後期の知識人の動向から明らかにするものである。「公議」「公論」とは、江戸幕府専制 政治に対し、政権分与を求める言葉として頻用され、明治維新以降の議会制成立に至る前提として重要なター ムである¹⁾。先行研究では、武家社会における合議制の文化や対等な言語コミュニケーションの慣行といっ た観点から、近世社会に「公議」「公論」の素地が形成されていたことが明らかにされている²⁾。

しかしながら、こうした慣行・慣習の主体が、現実の政治課題を超克し、幕府専制を打破する歴史的過程 として見通すには至っていない。そこで本研究では、幕府の専制政治の終焉にかかる要因について、江戸時 代後期に生きた知識人らの学知形成と政治参与の動向から明らかにする。政治意思決定に必要とされる学知 は知識人が創出するものである。したがって知識人たちは、江戸幕府の閉鎖的な政治空間を否定し、これま で排除されてきた政治主体の政治参画を企図する存在となりうると想像される。以上の視座から、本研究に おいては、蘭学者・大槻玄沢と儒者・大槻磐渓の二人に着目し、双方における「知」の創成と政治意思決定 への関心を示唆する史料を調査した。

19世紀の対外危機と蘭学者 19世紀前後、ヨーロッパ諸国が日本列島周辺の海域に頻繁に出没するよう になり、日本は未曽有の対外危機の時代へと突入していく。ロシア帝国使節の来航もその一つであり、とく に文化元年(1804)、レザノフの貿易要求に対し、翌年幕府が拒絶したことは周知のとおりである。この二 年後、ロシア人フヴォストフらがエトロフ島を襲撃し、幕府軍が敗走するに至った文化露寇事件が発生する。 一刻も早い紛争解決が急がれるなか、仙台藩の蘭学者・大槻玄沢(1757-1827)は、当時の北方問題に全面 的に携わった幕府若年寄・堀田正敦に向け対外政策を講じた。この上書は、『北辺探事補遺附或問』(国立公 文書館所蔵、自筆本)と題されており、管見の限り写本はない³⁾。本調査では、本史料を閲覧・撮影し、翻 刻のうえで分析を行った。

『北辺探事補遺附或問』は、玄沢自身による十問十答形式で、ロシアのみならず他の西洋列強の脅威を極 めて客観的な見地から説いたうえで、対露貿易許可を提示する。史料の内容詳細については割愛するが、と りわけ本史料の末には、「已に政府〈幕府〉ニてハ良策を定め給ふ事なるへけれとも、下として此を知るへ き様なし。……唯此御国ニ生れ出し浅からぬ国家の大恩を聊か報んとする所にして、婆心の衷情を筆にあら ハす也。万ニーツ取る所あらハ、余ガ寸志の幸とやいふべし。」(〈 〉の中・句読点は筆者による。以下同じ) と記されている。暗に幕府の専断による政策決定を批判し、諸藩の学者ながらも「御国(=日本)」に生ま れた「国家」の一員として、「国家」政策の意思決定への参与を試みたと読み取れる。

もとより玄沢は、一昔前の蘭学は「唯自ラ好ム所ヨリ為ス所ノ私学ニシテ公ニコレヲ修メシニハアラズ」 と批判し、蘭学は「国家ノ補益」たる学問であると自任していた4)。つまり、蘭学によって培われた学知は、 私的営為ではなく「公」に活用されてしかるべきであり、政治的営為に昇華することもあり得たのである。

¹⁾ 近世後期から幕末維新期にかけての「公議」「公論」にかんする代表的研究に、井上勲「幕末・維新期における「公議輿論」 観念の諸相」(『思想』609、1975)、宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質―「公論」世界の端緒的成立―」(『思想』 831、1993)、三谷博『明治維新とナショナリズム―幕末の外交と政治変動―』(山川出版社、1997) などがある。

²⁾ 尾藤正英「明治維新と武士―「公論」の理念による維新像再構成の試み―」(『思想』735、1985)、前田勉『江戸後期の思 想空間』(ペりかん社、2009)、同『江戸の読書会―会読の思想史―』(平凡社、2012)など。

³⁾ 本史料は、すでに吉田厚子氏によって史料紹介がなされており(吉田厚子「大槻玄沢『環海異聞』と北方問題」(『日蘭学 会会誌』9、1984))、吉田氏も写本の存在を確認していない。

⁴⁾ 大槻玄沢『蘭訳梯航』下(『磐水存響』(大槻茂雄、1912) 所収)。

こうした蘭学の質的転換は、幕府政治の外側にあった政治主体が「国家」政治に参与することを肯定するの みならず、幕府専制の限界という構造的問題を浮き彫りにするものでもあった。

知識人の政治参与と幕府専制政治の終焉 やや時代が下り、アヘン戦争からペリー来航期(1840~50年代) に差しかかると、知識人たちによる情報収集・分析・活用といった情報活動が盛んに行われるようにな る5)。こうした情報活動は、近世社会において築かれた既存の人的・物的ネットワークが機能することで可 能になったと推察され、先にみた大槻玄沢の次男である大槻磐渓(1801-78)も例外ではない。

磐渓は、江戸詰の仙台藩儒であり、江戸において、幕府昌平黌の儒者をはじめ諸藩の学者や町人にいたる まで幅広い文人ネットワークを有するとともに、父・玄沢以来の蘭学者とも知己であった。こうしたネット ワークは一連の情報活動を可能にする。その証左といえるのが、今回調査を行った『大槻磐渓雑録集』全八 冊(宮城県図書館所蔵、自筆本)である。制作年代を順に示すと、①天保三年(1832)②嘉永七年(1854) ③嘉永七~安政三年(1854-56)④安政四年(1857)⑤安政五~七・万延元年(1858-60)⑥文久元年(1861) ⑦文久二年(1862) ⑧明治四年(1872) であり、幕末維新期にかけて長期的・継続的に制作されたことがわ かる。欠年部分について、1・2冊目の間の天保四年~嘉永六年は、他の所蔵館に当該期の雑録が確認でき る⁶。 7 · 8 冊目の間の文久三年〜明治三年について、この間磐渓は江戸を離れ、国元仙台に帰郷していた。 仙台にいる間は情報活動そのものが困難であり⁷⁾、雑記の制作が不可能であったと考えられる。逆に言えば、 磐渓が江戸で築いた環境こそ情報活動に必要だったのである。

雑録集の内容については、対外情報にかんする記述が多い。たとえば、嘉永七年(1854)に来航したペリー 艦隊の詳細や和蘭別段風説書の写しがある。あるいは、当該期に書かれた上書や触書の写しも散見され、そ れらに対する磐渓直筆の朱字の書き入れがなされている。書き入れは必ずしも好意的でなく、むしろ個人的 な政治意見が記されている点で興味深い。つまり、雑録は、磐渓自身の政治意思を固める素材としても重要 であったと評価できる。

現実にも磐渓は幕府に対して対露・対米政策にかかる上書を提出している。その際、「陪臣〈諸藩の藩士〉 之我々為 御国家」に上申するとして、「廟堂之公議〈幕府内の議論〉ハ別段之御事ニ而、中々以下々之者 存付候通ニ難被遊ハ勿論之事ニ而、強而可奉申上様ハ無御座候へとも、不肖之私義多年苦心経営仕候愚策を、 此節之所ニ而、御耳ニ触置不申候而ハ、 皇国之一民たる詮も無御座、誠以残念至極ニ奉存候」と主張して いる8)。長きにわたる対外知識の蓄積によって創成した政策案にもかかわらず、幕府の外側の人間であるが ゆえに無下にされることは、日本国民たる甲斐もないということである。「陪臣」の身ながらも、その政治 的発言の有効性は、藩領域を越えた「御国家」にあると自覚し、自らの学知が「国家」政策に活かされてし かるべきとする論理は、玄沢とも共通した認識である。

おわりに 本研究では、近世後期を生きた知識人として蘭学者・大槻玄沢、儒者・大槻磐渓父子に着目し、 対外危機における二人の学知形成と、幕政参与にかかる動向を考察した。結論として、幕府の閉鎖的な政治 のありようを否定する論理は、彼ら知識人の知的営為の所産であったと評価できよう。

ただし、こうした知識人の知的営為が、現実の政治にいかに作用し、近代議会制の成立を迎えるのかまで

⁵⁾ 岩下哲典『改訂増補版 幕末日本の情報活動―「開国」の情報史―』(雄山閣、2008) の研究に代表される。

^{6) 『}大槻清崇雑記』 - (国立公文書館所蔵、写本) は、弘化三年~嘉永六年までの、『文化甲子魯西亜国王書翰和解他襍録』(早 稲田大学図書館洋学文庫所蔵、自筆本)は、文化元年から嘉永六年までの対外情報や上書の写しが認められている。いず れも制作年代は不明ながら、継続的に雑記を蓄積していたことがわかる。

⁷⁾ 磐渓が懇意にしていた幕臣・木村摂津守喜毅に宛てた書簡(文久三年)によれば、「東都之信、いつ方ゟも寂然ニ御座候 ……一向容子も相分り不申、此節之形勢何卒為御聞被下度」(柴田光彦「史料紹介 幕臣木村喜毅あて書簡一「旧雨手簡」 から一」(『横浜開港資料館紀要』11、1993)掲載史料26号)と、江戸の情報が入手できないため、木村に情報提供を求 めていることがわかる。

⁸⁾大槻磐渓「露西亜議一」(『大日本古文書幕末外国関係文書』二、131号)、同「露西亜議二」(『大日本古文書幕末外国関 係文書』三、23号)。

を実態に則して見通す必要がある。西洋の政治体制や社会制度に開眼する洋学者、あるいは公正無私な儒教 的理想の実現を標榜する儒者など、近世・近代移行期に存在する多様な知識人を対象に、近代化する政治空 間について通時的に解明することを今後の課題としたい。

最後に、本調査の感想を述べておきたい。調査にあたった史料は、いずれも自筆本で他に写本はなく、デ ジタルアーカイヴや活字になっていないものである。したがって、実際に所蔵館に赴いて史料を調査する必 要があった。とくに『大槻磐渓雑録集』全八冊については、本来宮城県図書館が制作したマイクロフィルム で閲覧可能であるが、朱字の書き入れがなされている可能性を踏まえ、現物を調査させていただいた。宮城 県図書館での調査にあたっては、利用日時が限られており、閲覧の承認にも時間を要するため、早めの予約 が必要であった。また、遠方での調査のため、往復の交通と宿泊場所は閲覧日時が決まり次第すぐに予約し なければならず、段取りは容易ではなかった。今後、遠方の所蔵館の史(資)料を調査される方には、入念 な準備と余裕をもった行動を心掛けることをおすすめする。

遠藤周作文学における長崎の実地調査

日本文化学分野・専門 博士後期課程2年

はじめに 申請者は、戦後日本のキリスト教文学を代表する作家遠藤周作(1923-1996)の文学を研究し ている。いかなるテーマにおいて研究を行うとしても、スムーズに研究を遂行するためには常に大量の資料 が必要であるし、どのような情報や資料などが自らの研究に役立つかは予想しがたい。一旦、文学研究者に とって研究する作家の関連資料は手当たり次第に集めるという姿勢を身につけるべきであると考えられる。 そのような意味でインターネットの CiNii や図書館の ILL(図書館間相互貸借)などのサービスは素晴らし いツールである。最近のトレンドは言うまでもなく「ChatGPT」の登場であろう。研究活動における ChatGPT の活用は必然的であると言っても過言ではない。しかし、ChatGPT の使用が活発化している今日 においても、インターネットを通じて手に入れることのできない資料は未だに数多くあるはずである。その ため、遠藤周作文学研究者として遠藤周作に関する情報や資料などが集積している「遠藤周作文学館」へ足 を運ぶのは避けて通れない。

調査内容について 上記のように申請者は、遠藤周作文学を研究しており、なかでも遠藤周作文学に表象 される「自然イメージ」を分析している。フィールドワークの最初の目的は、新たな「自然イメージ」の発 見と、遠藤周作文学館でしか得られない『生誕100年記念文集「遠藤周作とのめぐりあい」』と『公式ガイ ドブック「遠藤周作のすべて」』の入手などであった。そのため、遠藤周作文学の主たる背景である、自然 豊かな「長崎」に位置する遠藤周作文学館を探訪した。ところが、結果的に新たな「自然イメージ」の発見 は別の機会に譲ったが、予想外の収穫があった。まず、文学館には優に200冊を超える遠藤周作の全著作の 実物が新たに展示されていた。それらの著作のタイトルをいちいち確認することで、現在申請者が持ってい ない著作をチェックすることができた。また、ピックアップ展示「遠藤周作と清水崑」を通じて、新聞連載 エッセイ「狐狸庵閑話 人情編」の挿絵を担当した長崎市出身の漫画家清水崑10と、遠藤周作との関係を知 ることができた。最後に、企画展「遠藤周作と狐狸庵―おどけと哀しみが交わるところ―」も申請者の知識 の穴を埋めてくれた、印象的な展示であった。遠藤周作と「自然イメージ」との関係に集中していたあまり、 「狐狸庵」という遠藤周作のペルソナについてはないがしろにしていた申請者は、文字一つも残さず、企画 展の全ての文章を読み切り、ユーモア作家としての遠藤周作についても穿鑿するように深く反省した。

フィールド調査経験談 調査報告書を作成するまでいくつかのハプニングがあった。一つは元来、2025 年2月17日に行われる2024年度調査奨励金報告会に参加すべきであったが、遠藤周作文学館からのお知ら せを通じて、2024年12月1日から2025年3月7日にわたって臨時休館となったことが分かったのである。 結局、申請者は2025年度調査奨励金報告会に発表することになった。もう一つは、2~3時間かけて文学 館の文章を読み切るつもりで夢中になっていたが、思ったよりも早く閉館時間が迫ってきて、ほんの少しだ けを残して読み切るのを断念するしかなかった。文学館に申請者一人しかいなかったためか、ドアが閉まっ ていて外に出ることができなかったが、学芸員に助けられた。文学館や博物館などで調査する研究者であれ ば、十分時間の余裕を持ってミュージアムに行くことを勧める。

むすびに 申請者の文学館探訪は、このように学術的調査よりも「勉強」に近かったと考えられる。しか し、今回の文学館探訪を通じて、遠藤周作の「心あたたかな医療」運動に関するテーマを思い浮かべたこと と、狐狸庵に代表される遠藤周作のもう一つのペルソナを考察するという宿題などが与えられた。これらの 知識を博士論文にいかにして結びつけるのかが、今後の課題である。

¹⁾ https://www.city.nagasaki.lg.jp/uploaded/attachment/40576.pdf(2025年 5 月 30 日確認)

戦後超流派批評雑誌2誌を中心とした記事動向調査

塩野敬子 日本文化学分野・専門 博士後期課程 1年

はじめに 2024年度研究奨励金より国内調査費の奨励金を受け、2024年9月と11月の2回に分けて調査を行った概要を報告する。

本調査では、報告者の博士論文主要研究テーマである戦前・戦後の華道史の一部として、特に華道総合誌に焦点を当て調査するものである。タイトルにある2誌とは、昭和7年(1932)刊行の諸流の華道総合誌『華乃栞』、及び戦後刊行された超流派華道批評雑誌『いけばな芸術』であり、その記事内容と時代背景及び華道文化の動向を併せて考察と分析を行うためのフィールドワークであった。

調査の背景と目的 華道は近代以降、住空間の変化や芸術思潮の影響を受け、近代化に適応するべく花型 やその理念において変化が進んだ。特に大正末期から戦前にかけて、多様な立場の人物による華道の流派を 超えた華道総合雑誌(諸流派雑誌)が刊行された。これら「華壇」と言われる華道ジャーナリズムの隆盛は、 華道の近代化に重要な役割を果たし、戦後の『いけばな芸術』誌創刊に繋がる流れを作った。

本研究では、作品の「批評」を行い文化的高揚を図る当時の華道ジャーナリズムの動向を分析する。それにより、これまで詳細に研究されていない戦前・戦後の華道総合雑誌についての新たな学術的貢献に加え、将来の華道文化に資する示唆をも得られるのではないかと考える。

『華乃栞』は昭和7年(1932)、西阪精華(1891-1983、華道家)により戦前から戦後に刊行された諸流総合華道誌である。作品の相互批判を行う『挿花批判』等の記事によって批評文化を確立し、近代以降の自由花運動の展開に大きな影響を与えた。また『いけばな芸術』は昭和24年(1949)12月~昭和30年(1955)8月の6年弱、重森三玲(1896-1975、作庭家・華道評論家)によって刊行された雑誌で、戦後華道の芸術化と近代化を推進した。雑誌は家元制度を否定し、華道家を「作家」として平等に批評する場を提供し、戦後「前衛いけばな」ブームを背景に、従来の華道雑誌とは異なる批評誌として機能した。

誌面では重森三玲の華道芸術を主張する論説が掲載され、また次男で編集者の重森弘淹は、先鋭的な文化人らの寄稿を通じて華道の社会化を促進し、本誌は徐々に戦後華道のオピニオンリーダー誌としての地位を確立した。本誌は当初、1949年文部省主催第1回「日本花道展」の批評を基軸に「華道の芸術化」を推進し、その後も全国の花展や作家の批評を行い、華道文化の全国的な活性化にも寄与した。しかし華道の社会的拡張とともに家元制度の影響力が増大すると、雑誌理念と現実の乖離が深まり、1955年8月に突然終刊した。しかし華道の社会化はその後も大きく進展し、空間芸術としての展開、作品規模や使用素材の多様化など、本誌が影響を与えたものは現在まで続いていると考えられる。

今回のフィールドワーク調査の最大の目的は、雑誌が終刊を迎えた1955年の1月~8月(最終号)の調査を行い、雑誌理念と現実との乖離をより深く分析することである。これまで入手できなかった1955年の資料は、唯一国立国会図書館にマイクロフィルムとして残っている。

他方、戦後華道批評誌に大きな影響を与えた戦前の華道ジャーナリズムの流れを踏まえるため、『華乃栞』 (1932-) の昭和初年度の誌面分析を行う必要があった。それら調査資料をもとに、戦前・戦後の華道批評メディアの継続性や特質、その変容についても詳細に調査を行い、近代華道史及び出版文化史の中での歴史的意義を位置づけることをも目的とする。

先行研究としては、三頭谷(2003)や工藤(1994)らによる関連書籍内に、『いけばな芸術』が近現代華道史において重要なジャーナルであったとの言説が折々見られるものの、雑誌に関する詳細な研究はほとんど行われていない。また、華道雑誌を出版文化の視点から分析する研究も乏しく、本研究はその未踏分野における初の分析を試みるものである。

調査方法・内容など 調査回数2回・調査先は東京都・千葉県の図書館および文学館の三か所である。

第1回目調査日程:2024年9月5日休~6日儉 調査先:国立国会図書館・日本近代文学館

第2回目調査日程:2024年11月20日(水)~21日(木) 調査先:麗澤大学図書館・国立国会図書館

調査先①:国立国会図書館:『いけばな芸術』最終年度1955年の1月~8月をマイクロフィルムで所蔵し ている。登録者(無料)であれば利用方法は簡単で、マイクロフィルム資料を拡大し写せる PC ソフトから 直接図書館への複写申請も行える。1回目・2回目共に、今回の当初目的資料だけでなく、周辺の貴重な資 料を多く調査収集することができた。

調査先②:日本近代文学館:東京都目黒区駒場にある民間財団が運営する文学館。120万点の近代文学に 関わる資料を収蔵し、会員になり(有料)申請すればその場で閲覧・複写も行える。ここでは戦前の『華乃 栞』に関する資料を調査収集した。ただ保存状態があまり良くなく、誌面のシミと頁間の癒着が多く内容は 6割ほどしか確認できなかった。その後2回目の調査で国立国会図書館が所蔵する同誌の資料を複写して補 完した。

調査先③:麗澤大学図書館:1回目の調査で、『いけばな芸術』終刊後、1973年に当時の関係者によって『い けばな批評』という雑誌が刊行され、3年弱の短期間で終刊したことが判明した。全国でもこの雑誌の全号 を所持しているのは本大学図書館のみであり、千葉県という距離も今回の調査旅行で行ける範囲であった。 事前に図書館にメールで閲覧依頼を行った後、2回目調査の初日全てを使い、現地にて刊行期間全号の主要 部分を複写できた。

調査の成果・結論 『いけばな芸術』の調査では、以下について考察できた。

- (1) 華道の社会化と本誌の役割:本誌は芸術家や文化人の寄稿を取り入れ、華道の社会的認知を拡大した。 さらに「芸術新潮」他一般誌とも相互交流し、戦後の雑誌文化に影響を与えた(「芸術新潮」誌も今回の調 査で資料収集を行えた)。
- (2) 批評と提言のメディアとしての機能:本誌は一貫して「芸術・美術・造形」の視点を強調した批評を 行い、華道の芸術性を体系化しようとした。批評を通じ、若手の台頭や地域華道の活性化を促し、文化人や 研究者の寄稿で学際的な議論を喚起した。
- (3) スクーリングと出版メディアの影響:約300人が参加した雑誌主催の「花道夏季大学」は、戦前の『華 乃栞』による「華道大学」との相似性が確認され、両誌は出版メディアを通じた華道教育拡張の試みを行っ ていたことが明らかになった。
- (4) 終刊に至る経緯:『いけばな芸術』終刊年は今回の調査で、1~3月号は遅延発刊、4~6月号は予 告なく休刊、7月号で復活するも、続く8月号では次号予告も掲載されているにもかかわらずその号で突如 終刊を迎えていたことが判明した。これら不安定な動向と記事内容、ページ数減少や、重森弘淹が編集長を 退いた経緯などが見て取れた。その背後にある、1952年頃より始まった華道流派の家元システム強化によ る大企業化、またそれらが批評という文化を嫌う風潮が背景にあることも誌面記事より読み取ることができ た。これら経緯から今後さらに分析を深める予定である。

戦前の『華乃栞』また1973年の『いけばな批評』についても、『いけばな芸術』を軸として戦前戦後の文 化変容の流れとして、また出版文化の一部としても体系的に位置づけることができると考える。

調査の感想と個人的進言 両回調査共に、現地でしか閲覧複写できない資料が多かったため、今回の調査 奨励金を活かした調査旅行は有意義であった。ただ時間は正直に言って足りないと感じた。現地調査では、 連鎖式に新たな関連資料を発見することがあり、そちらを閲覧していると当初の目的よりも時間がかかるた め、毎回閉館時間前に慌てることになってしまった。複写手続きは閉館前にはかなり混雑するのでこの点は 注意した方が良いと感じた。また国立国会図書館以外は、事前連絡をしておいた方が良い。HP 掲載の休館 日以外にも休館していることは折々ある。また今回の麗澤大学図書館などは事前連絡していたため、倉庫の

奥の資料をすぐ閲覧できるように出しておいて下さったので、時間も無駄にならず何より円滑に調査を行う ことができた。

またこれは個人的に今回の台風による日程変更が良い方向に向かった結果だが、当初は夏期休暇期間であ る7月末と8月初旬を調査日程としていた。しかし度重なる台風の影響で列車が運休し、9月と11月にず らして変更した。しかし1回目と2回目の間が2か月近く空いたことで、1回目の過不足分や更なる情報の 必要性などを考える時間ができ、2回目はより明確な目的で行えたので結果として良かったと感じている。

最後に、今回、調査奨励金に採用していただいた関係の先生方に感謝を申し上げたい。また主指導教員の 日比嘉高先生からは研究を推進する力をいただき、教育研究推進室のご担当者様には計画変更や発表会の折 には大変お世話になり、心より感謝を申し上げたい。

参考文献

- 三頭谷鷹史 (2003)『複眼的美術論 前衛いけばなの時代』美学出版.
- 工藤昌伸(1992-1995)『日本いけばな文化史』全5巻 同朋舎出版.
- 目黒区美術館ほか(1995)『戦後文化の軌跡 1945-1995』朝日新聞社.

技能実習制度の過渡期における送り出し国の日本語教育の調査プロジェクト

時野加奈子 国際・地域共生促進コース 博士前期課程2年

調査概要 本プロジェクトは、技能実習制度の廃止と新制度である育成就労制度への移行期において、技 能実習生の送り出し国の日本語教育を取り巻く諸相の変動を追跡する調査である。本調査は修士論文の考察 や今後の展望に関連するものである。修士論文では、ベトナム・ハノイの送り出し機関に勤務する元技能実 習生日本語教師を対象とし、日本での生活や就労経験、および送り出し機関での教育経験を通じて、彼/彼 女らの教育観や教育実践がどのように変容したのかを解明した。これにより、送り出し機関における日本語 教育の実態を理解するための基礎データを提供することを目指している。研究課題として以下2点を設定し た。「研究課題1:元技能実習生日本語教師の教育観はどのように形成されるのか。」と「研究課題2:元技 能実習生日本語教師の教育実践はどのようなものへと変容するのか。」である。

本プロジェクトのインタビューの調査協力者は、ベトナム・ハノイにある4つの送り出し機関に勤務する 元技能実習生日本語教師 4 名である。筆者は2023年 4 月から12月にかけて、各調査協力者に対し3回から 6回のインタビューを実施してきた。これに加えて、本プロジェクトでは追加調査を行った。また、2024 年6月には、技能実習制度の廃止および新制度である育成就労制度の創設に関する法改正が国会で可決成立 した。この技能実習制度の変更を踏まえ、本プロジェクトでは、新制度の導入が調査協力者の日本語教師と しての位置づけにどのような影響を及ぼすのかについても明らかにする。特に、技能実習生に対する日本語 教育の教育に対する価値観や教育実践に対する教師自身の立場の変化に焦点を当てた。

調査方法 本プロジェクトは2024年10月8日から20日にわたって実施した。本研究では、ベトナム・ハ ノイに勤務する元技能実習生日本語教師の経験が、技能実習生に対する日本語教育にどのような影響を与え ているのかを考察するためにライフストーリー研究法を用いる。本研究では、桜井(2002)が提唱した対話 的構築主義の考えに則り、調査協力者と筆者の対話を通じて共同で構築される相互行為を示し、そこから調 査協力者の主観的意味を解釈することに重点を置いている。さらに、本プロジェクトでは、2023年に実施 した調査で語られた教育実践に関する経験について改めて聞き取り、教育実践の変化やその経験の意味づけ に生じた変化も検討している。

結果 研究課題1では元技能実習生日本語教師の送り出し機関の日本語教育に関する教育観の形成要因を 考察した。その結果、日本で生活や就労をした経験、送り出し機関内の勉強会に参加した経験、ベトナムで 日本語を学んだ経験、日本の受入機関から評価を受けた経験といった多様な経験が教育観に影響を与えてい ることが明らかになった。調査協力者全員に共通する教育観として、日本の就労現場で求められる言語、態 度、行動を学習者に習得させることが重視されていることが明らかになった。調査協力者は日本での技能実 習生としての経験を通じて、日本の就労現場で求められる態度や行動を学習者に習得させることを重視して おり、この点は技能実習生が日本の職場で直面する困難に対処する上で有用であると考えられる。しかしな がら、学習者が日本の職場文化に一方的に順応することに終始してしまうリスクがあると考えられる。また、 送り出し機関内で教師らによって実施されている勉強会は教育実践の発展に寄与する可能性があるが、勉強 会の現状としては教師同士の授業批評が各教師の経験の共有に依存しているため、同質的な教育観や教育実 践が再生産される恐れがある。その結果、新たな視点を導入することが難しくなり、多様な教育観が育まれ にくい可能性があることが示唆された。

さらに、研究課題2では教育実践の変容を分析した。その結果、元技能実習生日本語教師が他の教師の実 践や助言を取り入れ、教育実践を変容させていることが判明した。具体的には、視覚的要素を活用した授業、 ゲームを取り入れた授業、TPR を用いて指示に基づく行動を促す授業が挙げられる。一方で、教育実践の

変容は効率的な知識伝達を重視する教育観の範囲内に留まっている傾向も明らかとなった。

また、ベトナム・ハノイの送り出し関係者が「軍隊式」と呼ぶ規律訓練が実施され、従順な技能実習生を育成することを目的とした教育が行われていることが報告されてきた(吉田 2021等)。しかしながら、本プロジェクトの調査で調査協力者の送り出し機関を再訪した結果、「厳しく教える」という方針も徐々に変化しているような語りも見られた。この背景の一つの要因には、技能実習生希望者の減少という現象が関連していると考えられる。宋(2020)は、中国の送り出し機関において、技能実習生の希望者減少に伴い、従来の「送り出し機関が技能実習生候補者を選ぶ」関係から、「技能実習生希望者が送り出し機関を選ぶ」という方向へ変化しつつあると指摘している。ベトナムのハノイにおいても、技能実習生の希望者が集まりにくくなっていることが調査協力者の語りから明らかになった。このような状況を踏まえると、ハノイにおいても技能実習生の希望者の減少を契機として、従来重視されてきた従順性を養成する教育方針の再考が求められてきたのではないかと考える。

体験談 2023年と2024年のベトナムでの調査経験を踏まえ、これからフィールド調査を検討されている方のご参考になればと思い、三点を共有させていただきます。第一に、海外で調査を予定されている場合は、その国や地域で調査許可が必要かどうかを事前に確認されることをおすすめいたします。調査を行うフィールドによっては、外国人による調査に許可が求められる場合があると聞いたことがありますので、事前にご確認いただくと安心かと存じます。第二に、インタビュー調査を実施される場合は、インタビューをする前に調査協力者との関係を築いておくことが大切かと思います。留学先で使用される言語での挨拶や日常的なやり取りをある程度習得しておくと、円滑な調査につながるのではないかと感じました。第三に、ビザの取得についてです。私の場合は、ビザの取得に関する手続きや現地機関とのやり取りに思いのほか時間を要しました。そのため、留学先のスケジュールや現地の祝日・休暇日を事前に把握し、先方の忙しい時期の連絡は避けるようにすると、より円滑に手続きを進められるのではないかと存じます。

最後になりましたが、充実した調査を行い、研究に専念できましたのは、名古屋大学人文学研究科の「学 位論文のための調査奨励金」のご支援のおかげです。心より感謝申し上げます。

参考文献

桜井厚 (2002)『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方―』せりか書房.

宋弘揚(2020)「中国人技能実習生の増加鈍化期における送り出し機関の方針転換―中国山東省青島市を事例に―」『地理学評論』93巻5号、pp. 372-386.

吉田舞(2021)「恩顧と従属的包摂—外国人技能実習制度における労務管理—」『社会学評論』71巻 4 号、pp. 671-687.

2. 教育研究推進室主催の行事(FD・ワークショップ・その他)

2-1 FD・ワークショップ・その他一覧 (2024年度)

年月日	発表者	題目・概要等	参加 人数
2024年 4 月10日	山中 海瑠・坂上 優太	日本学術振興会特別研究員応募説明会(1回目)	39
2024年 4 月~2025年 1 月	別途記載	自己紹介の会(通算第19~26回)	
2025年 1 月15日	山中 海瑠・坂上 優太	日本学術振興会特別研究員応募説明会(2回目)	22
2025年2月5日	ハーツハイム ブライアン ヒカリ キム ジュニアン	人文系研究者にとっての産官学連携	23
2025年 2 月17日	別途記載	調査奨励金報告会	16

2-2 自己紹介の会開催一覧 (2024年度)

通し 回数	年月日	登 壇 者	所属・分野専門	発表タイトルもしくは研究分野やキーワード	参加人数	
19	2024年4月1日	井上 隼多	人類文化遺産テクスト学 研究センター	歴史考古学・三次元計測・須恵器	13	
17	2024年4月1日	GRUNOW Tristan	超域文化社会センター	明治期の国家形成・台湾/韓国統治下の都市形成・東京の街路と都市近代化	15	
20	2024年5月22日	三田 昌彦	共通	インド中世史・王権・刻文	23	
20	2024年 5 月22日	大平 英樹	心理学	「精神(mind)」を創発する脳と身体	23	
21	2024年 7 月24日	伊藤 伸幸	共通	先古典期文化論・メソアメリカ考古学・オルメ カ文化	32	
		加藤 弓枝	日本文学	近世和歌・書誌学・TEI		
22	2024年 9 月11日	李 乃琦	YLC	古写本・古代仏教事典・データベース構築	9	
22		中川原 育子	共通	仏教美術史・キジル石窟壁画・絵画材料と技法		
23	2024年10月2日	崔 境眞	インド哲学	チベット仏教認識論・論理学研究	25	
23		土屋 洋	東洋史学	中国近代教育史・台湾史・教科書		
24	2024年11日12日	馬然	映像学	Inter-Asian and Sinophone Cinema and Media Studies: Infrastructure and Affects	14	
24	2024年11月13日	甘 靖超	超域人文学繋	大きな歴史からこぼれ落ちる無名の人々の暮ら しと心を記録	14	
25	2024年12月9日	藤木 秀朗	映像学	環境問題と映像・社会主体としての映画観客・ 日本近代の映画スターの役割	20	
		坂部 晶子	文化動態学	植民地経験から社会主義的近代へ		
26	2025年1月30日	大井田 晴彦	日本文学	平安朝文学・物語文学	15	
20	2023年1月30日	井土 慎二	言語学	北尾張方言・ブハラの言語・『訳詞長短話』	13	

2-3 FD 報告

人文系研究者にとっての産官学連携

ミギー ディラン・小川翔太

登壇者:ハーツハイム・ブライアン・ヒカリ(早稲田大学国際学術院・国際教養学部准教授)

キム・ジュニアン(新潟大学経済科学部学際日本学プログラム准教授)

司会・指定討論者:ミギー・ディラン(メディア文化社会論) 小川翔太(映像学)

開催日時:2025年2月5日(水) 12:00~13:30

実施方法:Teams ウェビナー

参加者:23名

※今回の FD は学外から登壇者を迎えて開きました。ざっくばらんな意見交換の場とするため、登壇者には予め 発表内容の公開を限定する前提で話してもらいました。つきましては、例年掲載している FD 全体の文字起こ しに代えて司会者による報告文をお届けします。

* * *

趣旨

産官学連携が日本の大学機関でスローガンとして台頭したのは、米国がリードする産学連携による経済活性化の試みが他地域でも積極的に模索されるようになり、それ自体が世界の高等教育を秤にかける新自由主義的な条件下で一つのベンチマークと化してきた1990年代のことだとされています。とはいえ、その定義や範囲に関して領域を超えた合意があるわけではありません。理工医学系での議論では、先端研究から特許取得あるいはベンチャー起業といった一定のイメージが共有されているようですが、人文系での議論には必ずしも参考になるものではありません。

このように、研究者側からのニーズよりも産業界からの声や(交付金が先細りになる中で競争を強いる際の建前といった)大学ガバナンスの観点から提唱されてきた「上から」のスローガンであることが否めない「産官学連携」ですが、同時に、多様な研究教育の目的に合わせて「下から」柔軟に解釈する試みが現場レベルで蓄積されてきたことも見過ごせない事実でしょう。

この FD の目的として想定しているのは、産官学連携の建前の説明でも多様な形態の網羅的な紹介でもありません。具体的なケーススタディの紹介を通して、参加者を踏まえた多様な実践例や考え方について意見交換ができればと思います。

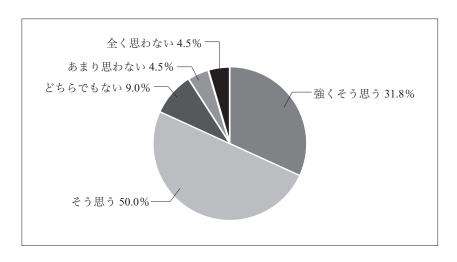
前説(ミギー・ディラン)

名古屋大学でも日頃耳にするキーワード、産官学連携。たぶん、ご参加の皆さんも学術研究・産学官連携推進本部からのメール、あるいは教授会の報告事項や審議事項で聞いたことがあるでしょう。東海国立大学機構では、そのミッションとして「起業支援」や「共同研究」と並んで「産学交流」を掲げており、それらを通して研究機関の研究力強化、東海地域の課題解決、経済的活性化を図ると唱えています。学術研究・産学官連携推進本部の令和6年度の報告書には、産官学連携の研究プロジェクトを実施するセンター、講座、部門施設が学内に35件設けられていること、文部科学省の令和4年度のデータには、652件のプロジェクトが実施中であることなどが記されています。これらは環境医学と理工系の事例がほとんどです。人文学系の

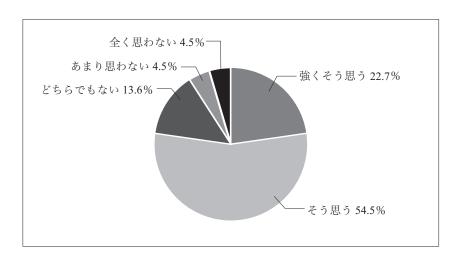
事例が少ないことから、こうした「組織」対「組織」の連携がどこまで人文学研究で可能なのか必要なのか、 疑問に思われるかもしれません。件数から言えば、産官学連携の総合件数における人文系のプロジェクトは わずか1%未満ということです。しかし、このデータがどこまで多様な実態を反映しているか確認する意味 で今回の FD に先立って人文学研究科の構成教員を対象にアンケート調査を行いました。回答者は22名と若 干少ないものの、課題が見えてきます。

アンケート調査の結果

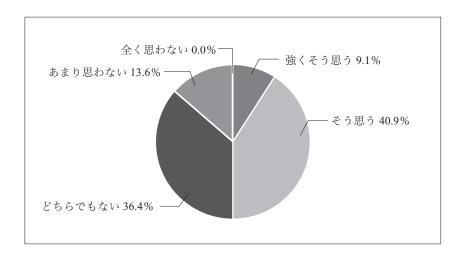
1) ご自分の研究を行うために地域中小企業、若しくは行政機関、NPO・NGO 法人との協力は必要だと思 いますか。



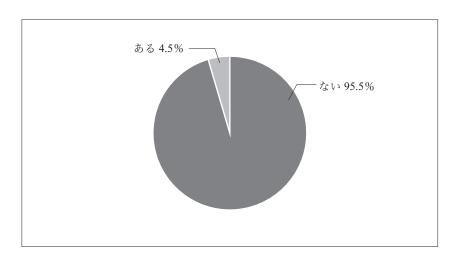
2) 逆に地域中小企業、若しくは行政機関、NPO・NGO法人の視点から見ると、ご自分の研究は経済的、 若しくは社会的有用性はあると思いますか。



3) ご自分の研究を行うために科研費以外の外部助成金(例えば財団・企業からの資金など)は必要だと思 いますか。



4) ご自分の研究について名古屋大学の学術研究・産学官連携推進本部の事務スタッフと相談したことがあ りますか。



※他にコメントも募りましたが、回答者の匿名性を守るために報告書には載せないことにしました。

回答データから分かるように、回答者の半数が自身の研究が「地域中小企業、若しくは行政機関、NPO・ NGO 法人との協力は必要」であるとの見解を示し、さらに31.8%が「強くそう思う」と回答しました。また、 自らの研究が地域中小企業、地方自治体、NPO、NGO に社会的若しくは経済的利益をもたらす可能性があ るかどうかに関しては、54.5%が「そう思う」、22.7%が「強くそう思う」と回答しました。同時に、研究を 行うために科研費以外の外部助成金(例えば財団・企業からの資金など)の必要性に関しては、必要との回 答が半数に過ぎず、資金のみならず情報交換などの産学交流による相乗効果を求める回答者が少なくないと 思われます。最後に一番驚く数字ですが、回答者の95.5%が名古屋大学の学術研究・産学官連携推進本部の 事務スタッフと相談したことがないと答えました。

文系産官学連携の課題と可能性

産官学連携のあり方に関する研究を俯瞰すると、近年では人文学の知見を活かした社会課題の解決や、企

業・自治体との協働が注目される傾向にあり、人文学の多様な研究教育の目的に合わせた官学、産学、産官 学連携の再定義や、いわゆる「文系不要論」を踏まえた再定義を呼びかける声もあります。そこで今回の FDでは、複数の視点から多様な産官学連携の形態について検討し、有意義な意見交換の場をつくりたいと 考えています。

登壇者のハーツハイム・ブライアン・ヒカリ先生とキム・ジュニアン先生は、ともにアニメ・視覚メディ アの専門研究をされています。クール・ジャパン戦略の導入以来、アニメ、ゲームなどの視覚メディアは日 本の代表的な文化産業となっており、国内外で大きな経済効果と文化的影響を持つ知的財産と見なされてい ます。そのため研究面でも、大学(学)、産業界(産)、行政機関(官)が連携することで、コンテンツ制作 の支援、人材育成、地域振興、文化政策形成など幅広い領域で共同の取り組みが進められています。ハーツ ハイム先生とキム先生は、研究チームの協働と最先端の技術の行使によってかつてないほどの大規模で革新 的な研究に挑戦しています。

話題提供① ハーツハイム・ブライアン・ヒカリ准教授

〈登壇者の紹介〉

早稲田大学国際学術院・国際教養学部准教授。主な業績として、Hideo Kojima: Progressive Design from Metal Gear to Death Stranding (Bloomsbury, 2023), The Franchise Era: Managing Media in the Digital Economy (Edinburgh University Press, 2019) をはじめ数々のゲーム研究、アニメ産業についての論文、編著への寄稿あ り。

〈発表の概要〉

登壇者の過去の研究課題と現在進行中のプロジェクトを通してメディア産業とどのように関係を築いてき たか、また、障壁がある場合はどのように克服してきたかを中心に発表いただきました。アニメスタジオを 対象とした研究課題では、製作現場のフィールドワークや業界関係者への聞き取り調査を行うことは比較的 容易であり、人気アニメシリーズ「プリキュア!」の制作会議に同席したり、制作に携わったクリエイター にインタビューしたりすることが出来た。その後、小島秀夫という著名なビデオゲームデザイナーを主対象 としてゲーム産業を分析する研究課題に着手すると状況は対照的であり、権利ビジネスや業界内の熾烈な競 争を背景に研究者が開発・マーケティング関係者にアプローチする余地がほとんどなかった。解決策として 創作プロセスを示す公的史料の分析に重点をシフトしたとの話でした。

現在進めるデジタル人文学のプロジェクトについても、間接的な産学連携の事例の一つとして説明があり ました。これは、アニメやテレビドラマ、長編映画のクレジットをメタデータとして体系的に収集する国際 的な共同研究で、メディア研究者のレフ・マノヴィッチが開拓した文化解析の方法論を用いるものです。個々 の作品のクレジット情報からは見えることがない日本のメディア産業の諸相を可視化することができる有意 義なツールとなることが実例を通して示されました。例えば、ある著名なアニメーターが、背景画家の修行 時代を経てセルアニメーターへと出世し、ようやく監督デビューに至るキャリアパスを、網羅的なデータか ら「ヒートマップ」として視覚化できることがデモンストレーションされました。また、メタデータを活用 しない限り見えてこないクリエイター同士のネットワークを可視化することで、作家主義的な観点で看過さ れがちなコラボレーションの視点からメディア産業研究のアプローチを刷新することもこのプロジェクトの 展望の一つだと示されました。

話題提供② キム・ジュニアン准教授

〈登壇者の紹介〉

新潟大学経済科学部学際日本学プログラム准教授。映画祭の仕事を経て、アニメーション研究者に。主な

業績として、第一回日本国際交流基金ポラナビ著作賞受賞 単著『イメージの帝国――日本列島上のアニメー ション』(ハンナレ、2006年)をはじめ数々のアニメーション研究、映像アーカイブ研究の論文、編著への 寄稿あり。国際学術誌 Animation: An Interdisciplinary Journal (Sage Publications)、Mechademia: Second Arc (University of Minnesota Press) のアソシエート・エディターを歴任。

〈発表の概要〉

登壇者が2016年4月の発足時から研究者として携わってきた新潟大学アニメ・アーカイブ研究センター で行われてきたアニメ「中間素材」のアーカイブ化事業を中心に発表いただきました。この事業は、『機動 戦士Zガンダム』『新世紀エヴァンゲリオン』など多くの制作現場で中核的スタッフとして活躍してきた演 出家の渡部英雄氏から膨大なアニメ中間素材を新潟大学で預かり「渡部コレクション」として管理・保存・ 調査するもので、のちにガイナックス社から預かった劇場アニメ『王立宇宙軍 オネアミスの翼』の中間素 材も合わせて視聴覚アーカイブの世界で未だ位置付けが明確でない中間素材の扱いを学術的かつ実践的に模 索してきた先駆的な試みです。ここで中間素材と呼ぶのは、キャラクターデザイン、絵コンテ、原画、セル 画、背景画、脚本、アフレコ台本、さらにスタッフによる手書きのメモに至るまでアニメ制作の様々な段階 と局面で生成される多様な紙・セルロイド資料で、これらを体系的に調査することで完成作品の分析だけで は捉えることができない制作過程の試行錯誤を見ることができる点で貴重な資料です。これらの事業は、同 じく映像研究を専門とする石田美紀教授と、アニメ中間素材に興味のある複数の研究者と協力した共同研究 プロジェクトとして進めたものです。

この発表でも、著作権ビジネスの側面を持つメディア業界と連携することの難しさがテーマとして浮上し ました。中間素材をめぐる事業は、現在では紙・セルロイド資料自体を扱う新潟大学内のアーカイブで行わ れるものと、オンラインのデジタルアーカイブを担う共同プロジェクトに分岐しているそうですが、とくに 公開を前提とするデジタルアーカイブの試みでは著作権ビジネスの要請とどのように折り合いをつけるかが 課題となるようです。具体的には、一律にオンライン公開するのではなく条件付きの公開の仕組みを設ける という話ですが、加えて、ハーツハイム氏の発表を受けて、中間素材を個別に公開するのではなく、あくま でメタデータとして扱って全体の傾向を視覚化して示す潜在的な利用法もデジタルアーカイブにはあるとの 考えも示されました。なお、実践的な観点から、デジタルアーカイブと紙・セルロイド史料を扱うアーカイ ブの連動や画像データとメタデータの紐づけも本事業の難しさの一つとして示されました。

発表では他に、この事業をさらに発展させていくためには産学の連携を単独で考えるのではなく、他大学・ 研究機関との協力も視野に入れ、国際研究ネットワーク構築も検討する必要があるとの展望が示されました。

質疑応答

質疑応答では継続して考えていくべき視点がいくつか提示されました。所属する学部・学科によって産官 学連携を奨める動きに温度差がある点、発表で言及されたアーカイブあるいはデジタル人文学プロジェクト をさらに進めていくべきとする積極論と、公的なアーカイブの枠組みでなければ体系的な収集・保存・調査 に限界があることを同時に訴えていく必要性を唱える視点との間のジレンマ、そして、人文学における実態 は「ゼロ円からの連携」が一般的だと思われるが、各研究者の予算に依存した「官学連携」「産官学連携」 がどの程度データに反映されているのか確認する必要がある点、また、こうした人文学で既に行われている 連携の実態を詳しく捉えた上で今後のさらなる議論を期待したいことなどが、参加者ならびに登壇者の間で 確認されました。

Ⅱ 人文学研究科の教育・研究活動

1. 教員の著書

1-1 出版著書一覧 (2024年度)

単 著	書 籍 名	出版社	発行年月
和田光弘	アメリカは、いかに創られたか:レキシントン・コンコードの戦い	ン・コン NHK 出版 2024年	
Sanae Ito	Royal Image and Political Thinking in the Letters of Assurbanipal	Penn State University Press	2024年10月
河西秀哉	皇室とメディア:「権威」と「消費」をめぐる一五○年史	新潮社	2024年12月
飯田祐子	家族ゲームの世紀:夏目漱石『明暗』を読み直す	現代書館	2024年12月

単編著・翻訳その他	書 籍 名	出版社	発行年月
Nobuyuki Ito	Investigaciones arqueológicas en el área, de Tazumal dela zona arqueológica de Chalchuapa : proyecto arqueológico de El Salvador	Editorial Universidad Tecnológica de El Salvador	2024年
ヤン アスマン著 <u>安川晴基</u> 訳	文化的記憶:古代地中海諸文化における書字、想起、 政治的アイデンティティ	福村出版	2024年7月
俵山雄司	自由に話せる会話シラバス	くろしお出版	2024年10月
와다 미쓰히로 (<u>和田光弘</u>) 著 이용빈訳	미합중국의 탄생: 19세기 초까지 (植民地から建国へ: 19世紀初頭まで)	한울아카데미	2024年10月

	共編著 (~2名)	書 籍 名	出版社	発行年月
I	中村靖子・鄭弯弯	ことば×データサイエンス	春風社	2025年3月

1-2 受賞著書一覧 (2024年度)

	賞の名称	編著者名	書 籍 名	出版社	受賞年月
Г	アジア・ブックアワード2024: 最優秀図書賞」(一般書部門) 韓国出版協会(KOPUS)	今井むつみ・秋田喜美	言語の本質:ことばはどう生まれ、進化 したか	中公新書	2024年10月

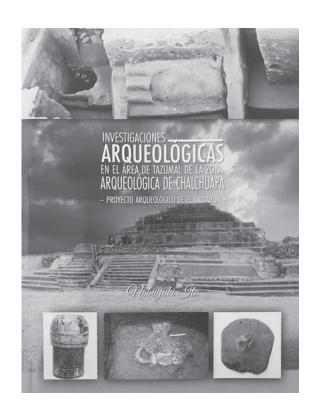
1-3 教員の自著紹介

伊藤伸幸 Nobuyuki ITO

Investigaciones arqueológicas en el área, de Tazumal dela zona arqueológica de Chalchuapa : proyecto arqueológico de El Salvador. Editorial Universidad Tecnológica de El Salvador, 2024.

本書は、平成16年から26年にかけて実施したチャ ルチュアパ遺跡タスマル地区で考古学調査した成果 をまとめた調査研究報告書である。

この考古学調査は、平成16年に採択された科学 研究費補助金基盤研究(B)(海外)(「メソアメリカ に於ける古代都市の発展に関する研究」平成16-18 年度、研究代表者:伊藤伸幸)を使って実施した。 また、エルサルバドル共和国文化遺産局との共同調 査であった。現地のエルサルバドル技術大学 (Universidad Tecnológica de El Salvador) の考古学専 攻の学生実習も引き受けると同時に名古屋大学の考 古学専攻の学生実習も兼ねていた。日本人の学生に とっては、現地の言葉であるスペイン語の実践と考 古学のフィールド調査実習を同時に進められる利点 があった。日本人の学生とエルサルバドル人の学生 は、同じ場所で考古学調査をするとともに、国際的 文化交流もおこなった。エルサルバドルの郷土料理 Pupusa(トウモロコシ粉でつくる日本のお焼きに似



た食べ物)を宿舎のまかないのおばさんの指導の下でつくり、現地の文化を共に体験した。こうした活動を 進めるために、「名古屋大学文学研究科内プロジェクト経費」を申請し、平成19、21、23年に経費を獲得す ることができた。また、神殿ピラミッドなどを発掘調査するために、平成21年名古屋大学総長裁量経費(「古 代メソアメリカの考古資料を用いた学際的発展研究」)、平成22年名古屋大学学術振興基金(「先スペイン期 メソアメリカの王権に関する発展的学際研究」)をいただいた。この場を借りて、名古屋大学と研究科にお 礼を申し上げたい。

一方、この調査で考古学実習を引き受けたエルサルバドル技術大学は、平成22年にカサ・ブランカ地区 調査(平成12-15年)の研究成果も出版した(Casa Blanca, Chalchuapa, El Salvador. Universidad Tecnológica de El Salvador, Nobuyuki, Ito (ed.), San Salvador, 2010)。この調査でも、同大学の学生実習を引き受けており、 大学間交流は長い歴史がある。その間、同大学の卒業論文の口述試験を引き受け、オンラインでエルサルバ ドルの学生とその他の先生とやり取りをした。また、エルサルバドル政府機関とも共同調査した。平成23 年には、ホンセカ湾沿いに位置する貝塚の調査成果を文化庁から出版した(Concheros en Punta Chiquirín, Departamento de La Unión. Colección Arqueológica 1, Secretaría de Cultura de la Presidencia, Nobuyuki, Ito (ed.), San Salvador, 2011)。エルサルバドル政府との協力関係は、平成9年から継続している。現地の遺跡公園に ある博物館も日本政府とエルサルバドル政府の協力によって竣工した。開館式では、現地の副大統領が開園 を宣言するとともに、我々に感謝状も授与した。平成27年には文化庁長官を国際交流基金で招待したが、 名古屋大学人類文化遺産テクスト学研究センター等との共催で名古屋大学で講演会も実施した。こうしたエ

ルサルバドルでの国際交流の成果としても、本書は重要な意味があると考えている。

本書は、エルサルバドル共和国文化庁文化遺産局に提出したタスマル遺跡報告書を基にして、新たな研究成果も入れて伊藤伸幸が編集した。9章で構成されており、13名が寄稿した。当初は、2020年に出版する予定であったが、コロナ禍により出版が遅れ、エルサルバドルにおける良き研究協力者である同大学付属人類学博物館館長の病気加療により更に遅れたが、2024年9月出版にこぎつけることができた。内容は以下のとおりである。

1. Antecedentes de las Áreas de Tazumal y Nuevo Tazumal Shione Shibata

2. Hipótesis del Desarrollo Arquitectónico en el Área de Gran Plataforma Shione Shibata, Shinya Kato

3. Excavaciones Nobuyuki Ito, Shione Shibata

4. Entierros

4.1 Entierro 0 Masakage Murano
4.2 Entierro 1 Nobuyuki Ito

4.3 Análisis de restos óseos Wataru Morita

4.4 Entierros en la Estructura B1-1 Masakage Murano

5. Cerámica Akira Ichikawa

6. Figurilla, Objeto de Barro y de Piedra Nobuyuki Ito

7. Analisis de Material

7.1 Análisis Físico y Químico Masakage Murano, Yoshiyuki Tanaka, Yasuhito Osanai,

Tomoko Ishida, Tatsuro Adachi, Kazuhiro Yonemura

7.2 Análisis de las Aves dentro del Vaso Ofrendado Sakiko Namigata

7.3 Análisis de Radiocarbono en Tazumal Akira Ichikawa

7.4 Tefra Tierra Blanca Joven en Tazumal Shigeru Kitamura

7.5 Yacimiento y Materia Prima de Laja Shigeru Kitamura

8. Desarrollo Arquitectónico en Tazumal Shione Shibata

9. Conclusión Nobuyuki Ito

この執筆者のなかには、現在も研究教育機関で調査研究に邁進している名古屋大学の学生だった研究者もいる。本書が執筆された研究者の糧になることを祈念したい。

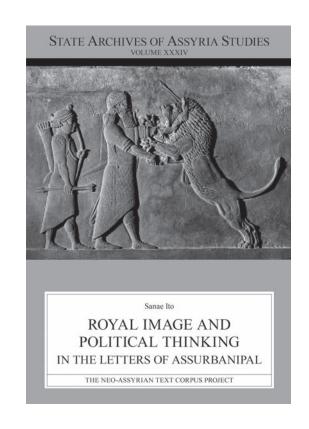
伊藤早苗 Sanae ITO

Royal Image and Political Thinking in the Letters of Assurbanipal. State Archives of Assyria Studies vol. 34, Penn State University Press for Neo-Assyrian Text Corpus Project, 2004.

本書は筆者がヘルシンキ大学に提出した学位論文を 推敲し、書籍としてアッシリア帝国とその周辺地域に 関わる研究書シリーズから出版したものである。

アッシリア帝国最盛期の王アッシュルバニパルは、紀元前668年から少なくとも紀元前630年まで同帝国を統治した。彼は治世初期にエジプト遠征を成功させ、治世中頃に彼の兄でありバビロン王であったシャマシュ・シュム・ウキン(在位:紀元前667-648年)が起こした大反乱を鎮圧し、この反乱に加担したエラム(現イラン)へ懲罰遠征を行った。彼の治世は先代のアッシリア王たちよりもはるかに長く、古代西アジア世界のほぼ全域を支配下に置いた。

アッシュルバニパルの治世に関する重要な資料群の一つとして、彼の書簡が挙げられる。現存する書簡は全部で345通から成り、うち100通がアッシュルバニパル自身による書簡(いわゆる「王の書簡」)で、残り245通は彼宛てに送られたものである。王の書簡は、政治的、軍事的、外交的な問題を、王/アッシリア帝国の視点から扱っている。



本書の目的は、アッシュルバニパルがこれらの書簡を通してどのようなアッシリア王のイメージを伝えようとしたのかを明らかにし、そのイメージがアッシリアの政策推進においてどのように用いられたかを検証することにあった。王の書簡の多くは、シャマシュ・シュム・ウキンの反乱とその余波の時期に書かれたものであり、反乱に深く関与した地域であるバビロニア、エラム、海の国に宛てて送られている。書簡の受取人には市民が最も多かったことから、帝国の根幹が揺らぐ中で広く一般民衆に語りかけることが、アッシュルバニパルにとって重要であったことが窺える。

彼は敵味方を問わず対話を試み、自らが彼らに与えた恩恵を強調し、正義・平和・平等をもたらすことのできる慈悲深く寛容な王として自らを描いている。バビロンに対しては反乱の最中でさえも融和的な政策を継続し、平和的解決を図ろうとした。またアッシュルバニパルは条約を通じて外国諸国をアッシリアの支配下に置こうとし、時には婉曲な脅迫によって直接的な圧力を加えることもあった。ある国々は、アッシリアから軍事的・政治的利益を得ることを目的として、自発的にアッシリアの支配下に入った。これら王の書簡を通じて一貫して示されるのは、アッシュルバニパルが神々への敬虔な信仰を持ち、自らの統治が神々の支持を受けていることを強調している点である。

出版にあたり、ヘルシンキ大学での指導教官であったパルポラ名誉教授に多大なお力添えをいただいた。パルポラ教授は原稿のチェック、組版作業、表紙の作成、アメリカの出版局とのやり取りなどの具体的作業を助けてくださった。また筑波大学の柴田大輔教授、ミュンヘン大学のラドナー教授およびノボトニー研究員は、当原稿の推敲作業をミュンヘン大学で行う機会を与えてくださった。皆様にこの場を借りて心よりお礼申し上げたい。

河西秀哉『皇室とメディア――「権威」と「消費」をめぐる一五〇年史』新潮選書

私はこれまで(卒業論文以来であるからもう25年ほど)、象徴天皇制の歴史を研究してきたが、そこでは、①様々なメディアにあらわれる天皇像・皇室像を読み取る、②「象徴」なるものにいかなる源流があり、それが戦後社会でどのように展開していったのか、その思想を検討する、③戦前から現代までを含めて、日本の近現代全体をカバーする、④昭和天皇や平成の天皇・皇后など、象徴天皇制に関係する具体的な人物の思想と行動を検討することで、彼らが象徴天皇制に与えた影響を明らかにする、といった研究の特徴があった。

本書『皇室とメディア――「権威」と「消費」をめぐる一五〇年史』は、そのうち①と③が中心となった研究で(もちろん②や④の要素も含んでいる)、そうした①と③の研究のこれまでの集大成的な本ともなっている。

①について言えば、本書では歴史学がこれまで対象 としてきた、新聞や雑誌ももちろん史料としている。 ただ、これまでは雑誌と言っても、『中央公論』や『文 新潮選書 Shincho Sensho 新潮選書 Shincho Sensho 新潮選書 Shincho Sensho Mawanishi Hideya Kawanishi Hideya Mawanishi Hi

藝春秋』など、月刊誌が研究対象となることが多かった。しかし本書は、『週刊文春』や『週刊新潮』などの週刊誌、そして『女性自身』や『週刊女性』『女性セブン』などの女性向け週刊誌を史料の対象として検討しているところに特徴がある。

これらは、名古屋の図書館ではほとんど所蔵されていない。東京の国立国会図書館や大宅壮一文庫を訪れ、閲覧した成果である。大学院生のときから、何日も国立国会図書館に通い、週刊誌を積みあげては、皇室記事を探していくという作業を繰り返してきた。女性週刊誌を何冊も読んでいる若い男性院生はめずらしかったのだろう。「何のためにそれを読んでいるの?」と、他の閲覧者から何度も聞かれたことがある。そのときの国会図書館は請求書に閲覧したい書籍や雑誌を書き、カウンターに持っていく形であった。何日も通って、ひたすら請求していたからか、顔を覚えられ、職員さんに「今日はどの週刊誌を読むの?」とも言われたことがある。そのたびごとに、「皇室とメディアの関係を調べていて、こんなおもしろいことが書いてあるんですよ」と説明していた。最近はデジタル化も進んで、検索も記事を読むのも便利になったが、それでも雑誌を一ページずつめくることは重要で、検索ではなぜか引っかからなかったにもかかわらず、あっと驚くような記事に出会うことも多い。

週刊誌など虚飾にまみれた記事ばかりだろう、と言われたことも多々ある。たしかにそのとおりではある。しかし、そこに記されている記事は、当時の社会が皇室をどう見ていたのかが反映されている。週刊誌は売れなければならないから、人々の興味関心や期待とまったく異なる記事は書かれない。むしろ、それこそ私たちの意識の反映なのである。そして、皇室にはこうあってほしい、こうあるべきだという前提があって書かれた記事も多い。その前提を読みとることこそ、人々の皇室像を明らかにすることにもつながるだろう。そうやって史料として扱われなかった週刊誌に、歴史学としてスポットを当てたことは本書の成果として自

負できる。

さらに、テレビなども含めて、検討対象としたことも本書の特徴である。映像をどこまで史料として扱う のか、歴史学でも様々な議論がある。本書では、1959年に開始され、現在でも続いている「皇室アルバム」 という番組の取材テープを閲覧させてもらったり、NHK アーカイブスの学術トライアルに参加させてもら い NHK 所蔵の映像を見せてもらったりするなかで、映像のなかでの皇室像の変化も検討することができた。 改めて、象徴天皇制がテレビとともに歴史的に展開してきたことがわかった。

このように、本書は、歴史史料とは何かといった点を考える起点にもなる本でもある。

③について言えば、本書は明治に西洋型の新聞というメディアが日本社会で広がったときから、令和の現 在まで、まさに日本の近現代一五○年を対象としている。歴史学研究者が現代の問題まで論じることには批 判も含めて様々な意見があるだろう。対象とすべき史料が未だ公開されていないケースも多いからである。 しかし、本書ではあえて近年までを対象として論じた。その理由は第一に、私たちは意外に近年に起こった ことを忘れている場合が多いからである。変化のスピードが速い現代社会において、忘れられてしまった出 来事に意味があると考えた。第二に、歴史を見ることで現代を考える手がかりを提供したいという思いから、 現代に繋がるように近年までの歴史を描いた。

本書の場合、雅子皇后が皇太子妃時代に受けたバッシングと秋篠宮家への注目は、興味深い事例と思われ る。これらは、現代の令和の時代の皇室とはまったく正反対であり、それゆえに学生に聞くと、なぜ雅子皇 后が療養中なのか理解できていないことも多い。バッシングがなぜ逆転し、雅子皇后は批判されなくなり、 秋篠宮家はバッシングを受けるようになったのか。象徴天皇制の歴史を見ていくと、二番手が常に批判に晒 されてきたことがわかる。ではそれを今後はどうしていったらよいのか。本書はそうした象徴天皇制の未来 を考える手がかりを、歴史学として提供するように目指した。

先ほどは、本書を①と③の研究のこれまでの集大成的な本と書いたが、読み直すとまだまだ残した課題は 多い。さらに研究を積み重ね、本書が研究の中間発表になるように次の成果を公表していきたい。さらには、 ②や④の研究もまとめる準備を進めているので、こちらもできるだけ早くに出版するようにしていきたいと 考えている。

中村靖子・鄭弯弯編著『ことば×データサイエンス』春風社

本書は、学術知共創プログラム2022年度採択プロ ジェクト「人間・社会・自然の来歴と未来:「人新世」 における人間性の根本を問う」(2022-2027年度) (Anthropocenic Actors and Agency in Humanity, Society and Nature: 略称 AAA プロジェクト〕の研究成果とし て企画された AAA 叢書の第一巻として出版された。 叢書の先陣を切って刊行される第一巻は、テキストマ イニングを用いた研究を収録している。データサイエ ンスを適用した新しい人文学を拓くことが、AAAプ ロジェクトの柱の一つであるからである。この方針に より本書では、これまでテキストマイニングに馴染み のなかった人文系研究者の論考も収録している。同時 に、データサイエンスを専門とする人たちには、人文 学に親和性のあるトピックを論じてもらうよう依頼し た。分析の手法も問題設定もさまざまであるが、人文 系、自然科学系を問わず、目指す方向を共有できるこ とを示すことが肝要だった。

タイトな締め切りにもかかわらず、原稿が提出され たのはありがたかった。しかし、そこからが多難な道



のりの始まりとなった。本書の執筆者は総勢一六名であり、そのほとんどが専門分野を異にしているため、 考えられる限りの汎通性を考慮した執筆要項を用意し、各原稿はそれに基づいていたものの、論文のスタイ ルがまるで違っていたのである。

それからの数ヶ月、日々をどう過ごしていたかはほとんど記憶にない。ひとつずつ原稿を読み、分野外の人間にも分かるように記述されているか、分かりにくく感じるのは自分だけが知識を欠いているためではないか、表現された事柄に対する理解は、執筆者の意図している内容に沿っているのか……。無限に自問を繰り返し、編集スタッフ(共編者の鄭弯弯先生を初めとして、岩﨑陽一先生、RAの田中基規さん)の間でも意見が交わされ、プロジェクトメンバーにも意見を求めた。その上で私は、専門知識が十分でない読者には理解しにくいと思われる個所について、なぜ分かりにくいか、どのような誤読を招きうるかを、「未来の読者からの質問」と位置づけ、執筆者に説明し、そのやりとりに明け暮れた。それは、関係したほとんどすべての人にとって、初めての経験であったにちがいない。自分の専門分野のジャーナルに投稿する場合とは違う配慮が求められたからである。幸い、どの執筆者もこちらの意図を汲み、積極的に対応してくれた。そうして出来上がったのが本書である。

プロジェクトが始動して僅か1年半で叢書刊行が可能と判断したのは、メンバーたちの研究交流が活発、かつ刺激的で、非常に充実していたからである。しかしこれらの期間以上に、編集に費やした数ヶ月の密な議論は、自分たちが今まさに「学際的な共同研究」のプロセスのさなかにあることを実感させてくれた。とはいえ本書の刊行は、まだ始まりにすぎない。プロジェクトが始動した頃には手探り状態だった私たちは今、研究期間後半に入り、これからの3年間を見据えて活動している。

2. 各種報告

2-1 大学院教育の国際化に向けて

国際化推進室活動報告(グリブ ディーナ)

文学部・人文学研究科国際化推進室では主たる業務内容として、留学生の研究・生活についての指導・助言、研究生および特別聴講学生の受け入れ、学術交流協定の締結および海外協定校との交流事業、学生の海外協定校への派遣、その他国際交流活動に、講師2名と事務員1名の体制で取り組んでいる。ここでは、2024年度の活動のなかから数点取り上げ、報告する。

1 留学生支援

在籍留学生からの日本での学業や生活に関する相談のほか、春期と秋期それぞれ新入研究生向けのオリエンテーションの開催、指導教員から新規渡日の留学生に配置されたチューター総数79組とのチューター面談の実施、修了生41名に対する留学生論文ネイティブチェックチューターの申請受付を行った。事務員のご尽力のもと、本部局の在籍留学生のために、日本人学生サポーターが日本語をチェックする日本語添削室を例年通り月4回の頻度で開室した。本年度はグーグルカレンダーによる予約システムを準備し、日本語添削を対面開催に戻すことにより、教育効果の強化を目指した。

留学生支援事業経費による全学予算からの支援を受け、曾煒講師による「人文学系留学生のためのキャリア支援事業」および本年度から新規でグリブ講師による「人文系留学生を主体とするスタディツアー事業」を企画し、運営した。キャリア支援事業においては、外部講師を招聘し、本部局の留学生に特化したセミナー、ワークショップ、個別相談が実施された。スタディツアー事業においては、留学生目線で愛知県および中部地区の観光魅力の再発見と発信を課題として掲げ、3回の実施で約22カ国出身の留学生と日本人学生延べ61名が参加した。

2. 研究生および特別聴講学生の受入、学生の海外協定校への派遣

研究生と交換学生の受入については、教務課との連携のもと国際化推進室 3 人体制で取り組んでいる。研究生は、出願者数が減少傾向にあるが、春期と秋期で98名からの出願書類の受付をオンライン出願システム NU-AAS により行った。

在籍生の海外派遣については、2024年4月22日に海外留学室による「海外留学プログラム説明会」を開催した。



スタディツアー 清州城見学 (2025年3月28日)



スタディツアー 松平郷見学 (2024年12月14日)

3. 学術交流協定の締結および海外協定校との交流事業

学術交流協定の新規締結では、授業料不徴収による学生交流を含むノルウェー・ベルゲン大学人文学部と の部局間学術協定の締結において窓口教員の事務的サポートを行った。

海外協定校との交流では、韓国・木浦大学校での大学院生集会のための学生引率に参加するほか、木浦大学校の日本語日本文学科の学部生6名のための短期受入プログラムの企画・運営において事務的サポートを行った。本部局の大学院生が講師を務める仕組みになっており、大学院生に教育の経験および国際交流の経験を提供する場にもなっている。

その他、インドネシア・パジャジャラン大学の教員による本学在籍生との座談会の開催や、名古屋大学米 国事務所や GMC 主催の全学パートナー校との学生交流プログラムへの講義提供等を行った。

4. その他

2024年度も国際化推進室主催の「第5回名古屋大学多文化共生川柳コンテスト」を実施し、在籍生のみならず日本および世界各地の方々から700首を超える作品をご応募いただいた。

日本の高等教育機関が変化を余儀なくさせられるグローバル社会の動向、多様化する留学生のニーズや状況に合わせて、国際化推進室一同、今後とも人文学研究科の国際交流の促進に努めてまいります。教職員の皆様方、関係者各位のご協力とご支援を引き続き賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

令和6年度人文学研究科研究プロジェクト 真福寺大須文庫のアーカイヴ創成プロジェクト ——今後の宗教遺産テクスト学の発展に向けて(郭佳寧)

人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター (CHT) の「アーカイヴ部門」では、宗教遺産テクスト学の視点から、名古屋市に位置する真福寺大須文庫を対象に、悉皆調査によって目録や奥書の集成をアーカイヴ化し、中世以来の文庫にまつわる人と知のネットワークの動態を明らかにすることを目指している。その際、本プロジェクトでは文献資料のみならず、宗教美術や寺院に伝わる指図、さらに宗教儀礼にも注目することが大きな特徴である。本プロジェクトは、CHT センターの「アーカイヴ部門」の活動を基盤とし、2024年度には以下の二つの主要なイベントを実施した。

一つ目は、2024年11月24日(日)に開催された「大須学ワークショップ2024」である。本ワークショップの第一部では、鳥居和之文庫長による重要文化財『将門記』の解説が行われ、第二部では名古屋大学の学部生による、明治・昭和期の大須観音に関する研究発表が行われた。当日は多くの地元住民が来場し、学生の発表にも高い関心が寄せられた。

二つ目は、2025年3月19日(水)に真福寺大須文庫との研究協定が締結されたことを受け、同月28日(金)に名古屋大学にて開催された「2024年度大須文庫調査研究報告会」である。報告会では、聖教30合の目録および断簡(110合301号~400号)の目録を収録した資料集が作成・配布された。また、大須文庫に所蔵される神道関係資料の重要性に関して、学外から研究者を招いて、最新の研究成果に基づく有意義な議論が展開された。当日のプログラムは以下の通りである。

開会挨拶:周藤芳幸(名古屋大学人文学研究科長)

第一部:文庫整理の歴史と課題

・報告者:鳥居和之(大須文庫長)

題 目: 文政目録から黒板目録へ

·報告者:三好俊徳(仏教大学)

題 目:名古屋大学による調査の成果と課題

・報告者:郭佳寧(名古屋大学)

題 目:コロナ禍以降の大須文庫調査の現状

第二部:真福寺善本叢刊第3期『神道篇別巻』刊行記念報告

・報告者:大東敬明 (國學院大學)

題 目:大須文庫所蔵神道関連聖教の調査と復元――八十通印信・『諸大事』を中心に

•報告者:伊藤聡(茨城大学)

題 目:中世神道研究史上における真福寺(大須観音)神道文献の重要性

全体討論

閉会挨拶:梶原義実(名古屋大学 CHT センター長)

本報告会では、これまでに行われた真福寺大須文庫に関する調査・研究の成果と課題を再確認するとともに、日本神道史研究における大須文庫所蔵資料の新たな価値が見出された。また、名古屋大学 CHT センターは、今回締結された研究協定を踏まえ、今後の断簡調査および悉皆目録の完成などを含めた事業の方針を明確にした。本報告会を契機として、今後は年度ごとに大須文庫の調査活動の進展および研究成果を積極的に公開し、人文学研究科における文化遺産研究の拠点形成とその発展的展開への貢献が期待される。

2-2 人文学とデータサイエンス

連続ワークショップ データに基づいた統計・機械学習モデルの基礎と応用 (鄭 弯弯)

人文学研究科研究プロジェクトの支援を得て、「連続ワークショップ:データに基づいた統計・機械学習 モデルの基礎と応用」を実施した。本プロジェクト実施の背景には、近年、データサイエンスや機械学習へ の関心が人文学分野においても高まりを見せているという状況がある。文学、言語学、歴史学といった従来 の質的研究が中心であった分野においても、数量的手法を用いたアプローチが徐々に広まりつつまる。こう した動向を踏まえ、本プロジェクトでは、データの抽出方法や目的に応じた適切な分析手法の選定、さらに 数量的分析が可能とすること・困難なことを含めた基礎的知識や実践的スキルの習得を通じて、学際的な視野の拡張を目指した。

本プロジェクトは、機械学習とデータサイエンスの基礎を学ぶとともに、外部講師を招いた講義を通じて、 人文学各分野との応用的な接点を探ることを目的として実施された。全10回にわたり、演習と講義を組み 合わせた構成であった。各回の内容は以下の通りである。

2024年

6月:演習①「機械学習入門と解析ツール」

6月:外部講師①「言語接触による言語変化の解明」沈力(同志社大学)

7月:演習②「データの集計と多次元データの記述」

8月:外部講師②「データから見る「折りたたみ北京」訳本の文体的特徴」劉雪琴(下関市立大学)

9月:外部講師③「歴史学研究における探索的データ分析の紹介」大知聖子(名城大学)

10月:演習③「データの構造の自律的な学習」

11月:外部講師④「自由会話音声をバイオマーカーとした研究・技術の紹介」

入部百合絵(愛知県立大学)

2025年

2月:外部講師⑤「社会科学におけるデータサイエンスの活用法」鄭躍軍(同志社大学)

2月:演習④「これまでの復習と自律的な学習」

2月:演習⑤「分析ソフト MTMineR の使い方」

学生、研究科所属の教員、さらには各分野の専門家が参加し、学び合う場が形成された。特に外部講師による講義では、参加者から多くの質問が寄せられ、専門領域を越えた活発な議論が展開された。こうした議論は、機械学習やデータサイエンスの手法が人文学の多様な研究対象といかに交差し得るかを具体的に示す機会となった。

一方で、演習においては、使用ツールへの習熟度に個人差があり、特にプログラミングに不慣れな参加者にとっては、基本操作の段階でつまずいてしまう場面があった。さらに、限られた時間内に演習と質疑応答の両方を十分に行うことが困難であったことから、内容の定着と理解を十分に図ることができなかった。このような点を踏まえて、今後は、事前学習コンテンツの整備、演習内容が参加者自身の研究にどのように応用できるかを意識させる設計とすることで、実践性の一層の向上を目指したい。

Ⅲ 各種データ

1. 教育の現況

1-1 教育プログラムの構成

資料 1-1-1 人文学研究科の学位プログラム・コースと分野・専門(2024年度)

学位プログラム	分野・専門/コース/プログラム			
言語文化学繋	言語学・日本語学・日本語教育学・応用日本語			
英語文化学繋	英語学・英米文学・英語教育学			
文献思想学繋	日本文学・中国語中国文学・ドイツ語ドイツ文学・ドイツ語圏ドイツ文化学・フランス語フランス文 学・西洋古典学・哲学・中国哲学・インド哲学			
超域人文学繋	映像学・日本文化学・文化動態学・ジェンダー学・メディア文化社会論			
歴史文化学繋	日本史学・東洋史学・西洋史学・美学美術史学・考古学・文化人類学			
英語高度専門職業人	英語高度専門職業人コース			
多文化共生系	国際・地域共生促進コース			
C20 EUM	言語学・文化研究プログラム			
G30国際プログラム	「アジアの中の日本文化」プログラム			

資料1-1-2 文学部のコースと分野・専門 (2024年度)

学位プログラム	分野・専門/プログラム
言語文化学繋	言語学、日本語学
英語文化学繋	英語学、英米文学
文献思想学繋	ドイツ語ドイツ文学、ドイツ語圏文化学、フランス語フランス文学、日本文学、中国語中国文学、哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴史文化学繋	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、文化人類学
環境行動学繋	社会学、心理学、地理学
G30国際	「アジアの中の日本文化」プログラム

1-2 国際化

資料1-2-1 大学院生の海外研修(延べ人数)(2024年度)

学年(人数)	研修先の国名 (機関名)	研修期間
	韓国(木浦大学・なし)	3日・6日
D3 (5)	アメリカ (なし)	6 日
	エジプト (なし2名)	2ヶ月・3週間
	韓国(木浦大学)	1 週間
D2 (8)	中国(国際会議・なし3名)	4日・半月/5日/4日
D2 (8)	台湾(中華佛學研究所・国際会議)	4日・3日
	イギリス(<u>ウォリック大学</u>)	7ヶ月半
	中国 (なし3名)	1週間/2週間/3ヶ月
	台湾(国立台湾大学)	3 週間
	韓国(国際会議)	4 日
	イタリア (国際会議)	6 日
	オランダ (国際会議)	1 週間
D1 (14)	イギリス(国際会議)	6 日
	ネパール(カトマンズ大学)	半月
	ポーランド(国際会議・なし)	10日・半月
	エストニア(タリン大学)	1週間
	ドイツ(なし)	半月
	アメリカ (ジョンズホプキンス大学)	9 日間
	台湾(国立台湾大学)	9ヶ月半(2023年度~)
	香港(香港大学)	9ヶ月(2023年度~)
	韓国(延世大学)	10ヶ月(~2025年度)
	フランス (なし)	半月
M2 (16)	ブラジル (カンピーナス大学)	1年 (2023年度~)
	中国(上海外国語大学7名・なし)	半月7名・1ヶ月半
	スペイン(国際会議)	1ヶ月半
	ドイツ(<u>フライブルク大学</u>)	10ヶ月(~2025年度)
	ベトナム(なし)	半月
M1 (4)	中国(上海外国語大学)	半月
1411 (4)	韓国(木浦大学3名)	3日2名/4日

注:協定校は下線で示されている。

出典: 文系教務課

資料1-2-2 学部生の海外研修 (オンライン含む) (2024年度)

学年 (人数)	研修先の国名(機関名)	研修期間
	イギリス (リーズ大学)	9ヶ月(2023年度~)
B4 (3)	フランス(リヨン第三大学)	5ヶ月
	アメリカ(<u>ノースカロライナ州立大学</u>)	3 週間
	ノルウェー(オスロ大学2名)	11ヶ月(2023年度~/~2025年度) 2 名
	オーストラリア(西オーストラリア大学)	半月
	デンマーク (コペンハーゲン大学)	11ヶ月(2023年度~)
	アメリカ(フロリダ大学・ノースカロライナ州立大学2名)	9ヶ月(2023年度~・~2025年度/10日間)
B3 (18)	台湾(国立台湾大学2名)	1年(2023年度~)/10ヶ月半(~2025年度)
D3 (16)	イギリス(<u>ウォリック大学・SOAS</u>)	9ヶ月(2023年度~)・10ヶ月半(~2025年度)
	韓国(ソウル国立大学校)	10ヶ月(2023年度~)
	中国(<u>同済大学2名・北京大学</u>)	半月2名・10ヶ月
	ドイツ(フライブルク大学・なし)	1ヶ月・半月
	ニュージーランド (カレッジオブイングリッシュ)	半年
	イギリス(LSI・サウスボーンスクールオブイングリッシュ・ケンブ	1ヶ月・1ヶ月・半月
	リッジ大学)	
	中国(<u>同済大学</u>)	半月
B2 (14)	アメリカ(ノースカロライナ州立大学3名)	1ヶ月・3週間2名
	タイ(<u>チュラロンコン大学3名</u>)	半月3名
	フランス(ストラスブール大学2名)	半月2名
	ドイツ(<u>フライブルク大学2名</u>)	1ヶ月2名
	中国(同済大学・大連理工大学4名・上海交通大学)	半月・1週間4名・1週間
	フランス (ストラスブール大学 7名)	半月7名
	アメリカ(ノースカロライナ州立大学・オレゴン大学)	3 週間・5 週間
D1 (25)	オーストラリア(西オーストラリア大学3名)	5 週間 3 名
B1 (25)	マルタ (GSE)	3 週間
	ドイツ(フライブルク大学 4 名)	1ヶ月4名
	イギリス (なし)	1ヶ月
	フィリピン (エンデランカレッジ)	半月

注:協定校は下線で示されている。

出典: 文系教務課

資料1-2-3 留学生経費支払実績額(2024年度)

区分	学期	支払実績額 (千円四捨五入)	備考
チューター謝金	前期	1,362	53名
ナューター副金	後期	1,724	70名
ネイティブチェック支援	前期	132	6名
	後期	573	31名

出典: 文系教務課

資料1-2-4 大学院留学生の受入実績(2024年度)

研修先の国名 (機関名)	研修期間	人数
東呉大学	1年	1
上海外国語大学	6ヶ月	4
西安外国語大学	1年	2
東華大学	6ヶ月	2
木浦大学	4 日	6

注:協定校は下線で示されている。

出典: 文系教務課

1-3 FD

資料1-3-1 ファカルティ・ディベロップメント (FD) 開催実績一覧 (2024年度)

主催もしくは講師所属先	実施内容	参加者数	日時	講演者
学生支援本部	名大生における心の特徴と健康―部局連携 のお願い	95	6/21	松本寿弥学術主任専門職
学術研究・産学官連携推進本部 (IR ユニット)	R6年度科研費について	92	7/17	吉田千穂主任リサーチアド ミニストレータ
人文学研究科	名古屋大学研究倫理教育 e-Learning	90	10/16	周藤芳幸研究科長
デジタル人文社会科学研究推進 センター	西洋古典特化型 AI「ヒューマニテクスト」	90	11/20	岩田直也准教授
人文学研究科	全学人事プロセス委員会とは何か	89	12/18	周藤芳幸研究科長
機構長補佐	研究費等の適正な使用について	91	1/22	矢野昌浩副総長

出典: 文系総務課

1-4 大学院生・若手研究者等の支援

資料1-4-1 大学院生支援事業実施状況(2024年度)

事業名	前期課程 (件数)		後期課程 (件数)			計	助成決定額(万円)	
	国内	国外	謝金	国内	国外	謝金		()111)
研究発表支援事業				0	0	0	0	0
フィールド調査プロジェクト	3	3	1	2	0	0	9	54
計	3	3	1	2	0	0	9	54

出典:教育研究推進室

資料1-4-2 各種研究員等受入状況

	博士研究員	博士候補 研究員	CHT 共同研究員	TCS 共同研究員	YLC 助教	客員研究員
2020年度	17	21	8	0	0	6
2021年度	15	25	8	2	3	7
2022年度	17	29	6	1	4	10
2023年度	23	27	7	1	4	5
2024年度	31	26	8	1	4	3

注:CHT=人類文化遺産テクスト学研究センター

TCS=超域文化社会センター

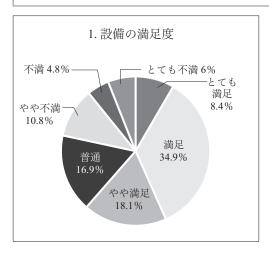
出典: 文系総務課

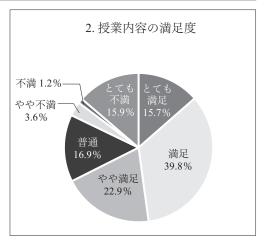
1-5 教育の成果

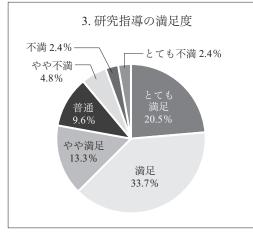
資料1-5-1 教育環境の満足度調査 (2024年度)

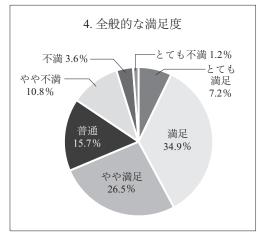
- ・教育環境の満足度調査の項目
 - 1. 教室や図書室などの施設設備の満足度を教えてください。
 - 2. シラバスや受講している授業の内容についての満足度を教えてください。
 - 3. 所属する分野・専門の教員からの研究指導などについての満足度を教えてください。
 - 4. 全般的にみた、本学部・研究科の教育および学習環境についての満足度を教えてください。
- ・教育環境の満足度調査の結果(%)

設問	とても 満足	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	とても 不満
1	8.4	34.9	18.1	16.9	10.8	4.8	6.0
2	15.7	39.8	22.9	16.9	3.6	1.2	15.9
3	20.5	33.7	13.3	9.6	4.8	2.4	2.4
4	7.2	34.9	26.5	15.7	10.8	3.6	1.2









出典: 文系教務課

資料1-5-2 大学院生等の研究業績件数

	論文	発表	学会	発表	受賞	研究助成	
	査読有	査読無	国際	国内	又貝		
2020年度	76	22	39	72	4	13	
2021年度	6	6	3	16	5	16	
2022年度	22	3	5	28	1	25	
2023年度	41	13	15	53	5	36	
2024年度	21	4	11	22	2	29	

〈受賞〉 名称 学年(年度)

朝鮮大学人文学研究院·518記念財団優秀論文賞 D3 (2020年度)

日本英語学会大会優秀発表賞 D3 (2020年度)

日語教育与日本学研究国際会議研究生学述論壇優秀論文評選 D3 (2020年度)/M1 (2022年度) 通算 2 名

第16回日本近世文学会賞 D1 (2020年度)

日本中国学会賞 研究員 (2021年度)

「伊勢の御師フォーラム 2021」懸賞論文最優秀賞 D (2021年度)

TMI QE1 優秀賞 M (2021年度)

漢日対比語言学研討会大学院生フォーラム優秀賞 D3 (2021年度)/D1 (2023年度) 通算2名

全国学生英語プレゼンテーションコンテストトップ50入賞 M (2021年度)

日本語用論学会第26回大会発表賞 D3 (2023年度)

SCMS Urbanism/ Geography/ Architecture SIG Student Writing Award D3 (2023年度)

宮本賞 D3 (2023年度)

THERS 優秀リサーチャー D3 (2023年度)

第十二届華大研究生史学論壇三等賞 D1 (2024年度)

第十六届中国日本学研究"卡西欧杯"優秀碩士論文奨三等奨 D1 (2024年度)

〈研究助成〉 名称 学年(年度)

公益財団法人松下幸之助記念志財団研究助成 研究員 (2024年度)

ロータリー米山記念奨学金 D2 (2021年度)

東海ジェンダー研究所団体研究助成 D5 (2024年度)

公益財団法人鍋島報效会研究助成 研究員 (2020年度)

TM1卓越大学院プログラム履修生 M (2021年度)

笹川科学研究助成 研究員 (2021年度)/D3 (2022年度) 2名 通算3名

日本学術振興会特別研究員 DC2 D2 (2021年度)

名古屋大学融合フロンティアフェローシップ事業(アジア未来創造分野) D1 (2021年度) 3 名/D2 (2022年度) 3 名/D1 (2023年度) 2 名/D2 (2023年度) /D3 (2023年度) 7 名 通算16名

伊藤忠兵衛基金 D1 (2021年度)/D2 (2022年度)/D3 (2023年度) 通算 3 名

東海国立大学機構融合フロンティア次世代リサーチャー事業 D3 (2021年度) 2 名/D1 (2022年度)/D2 (2022年度) 2 名/D3 (2022年度) 2 名/D3 (2023年度) 3 名 通算12名

日本学術振興会特別研究員獎励費 D2 (2022年度)/D3 (2022年度)/D3 (2023年度) 通算3名

人文学研究科大学院生支援事業 M2 (2020年度) 5 名/D1 (2020年度)/D2 (2020年度) 4 名/D3 (2020年度) 2 名/M2 (2021年度) 4 名/D2 (2021年度) 2 名/M2 (2022年度) 7 名/D1 (2022年度)/D2 (2022年度) 2 名/D3 (2022年度)/M2 (2023年度) 8 名/D1 (2023年度) 2 名/D2 (2023年度) 3 名/D3 (2023年度) 通算43名

丸山奨学金 研究員(2023年度)

ヒロセ財団奨学金 M2 (2023年度)/研究員 (2024年度) 通算2名

大幸財団第43回学芸奨励生 D3 (2023年度)

中華仏学研究所漢伝仏教青年学者論壇奨助金 D2 (2024年度)

メイク・ニュー・スタンダード次世代研究事業 D1 (2024年度) 9名/D2 (2024年度) 3名/D3 (2024年度) 2名 通算14名 サントリー文化財団若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成(鳥井フェローシップ) D2 (2024年度)

りそなアジア・オセアニア財団調査研究助成 D3 (2024年度)

人文学研究科研究奨励金 M2 (2024年度) 7 名/D1 (2024年度)/D2 (2024年度) 通算 9 名

1-6 進路

資料1-6-1 就職活動セミナー開催実績一覧 (2024年度)

開催日	名 称	講師
2024年11月22日	データで見る就職活動	キャリアサポーター (株式会社マイナビ)
2024年12月11日	文学部・人文学研究科 教職セミナー2024	磯貝直孝(愛知県立大府東高校 社会科) 榎本大湖(愛知県立半田高校 国語科) 幸野伶奈(愛知県立西尾高校 英語科)

出典:文系教務課·国際化推進室

資料1-6-2 学芸員・自治体職員・教員の養成人数

	学芸員	自治体職員	教 員
2020年度	3		
2021年度	3		
2022年度	7		
2023年度	13 (1)	11	22 (14)
2024年度	5	3	22 (2)

注:学芸員のカッコ内は、内数でリカレント教育

教員のカッコ内は、内数で大学教員

2023年度より、自治体職員・教員のカウントを開始

1-7 高大連携

資料 1-7-1 教員による高校訪問、高校による大学訪問、出張講義等実施実績一覧

	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度	2024年度	
10月 1日	私立 愛知淑徳高校	6月3日	私立 愛知淑徳高校	6月 15日	名古屋市立 緑高校	6月 21日	私立静岡理工科 大学星稜高校	7月 12日	愛知県立 明和高校
11月 9日	愛知県立 江南高校	6月 29.30日	私立 福井南高校	7月 7日	名古屋大学教育 学部附属高校	8月 16日	愛知県立 知立東高校	9月 5日	静岡県立 掛川西高校
11月 12日	名古屋市立 菊里高校	7月 第1週	名古屋大学教育 学部付属高校	7月 11日	三重県立 桑名高校	9月 21日	愛知教育大学 付属高校	9月 10日	岐阜県立 大垣北高校
12月 21日	愛知県立 明和高校	10月 15日	愛知県立 半田高校	7月 14日	愛知県立 明和高校	10月 18日	愛知県立 豊橋東高校	9月 11日	静岡県立 磐田南高校
3月 12日	福井県立 藤島高校	10月 21日	愛知県立 刈谷北高校	7月 15日	私立聖隷クリス トファー高校	10月 19日	愛知県立 刈谷北高校	10月 17日	愛知県立 刈谷北高校
		10月 25日	愛知県立 岡崎高校	9月 15日	静岡県立 磐田南高校	10月 19日	愛知県立 西尾高校	10月 24日	愛知県立 西尾高校
		10月 27日	愛知県立 豊橋東高校	10月 12日	愛知県立 半田高校	11月 7日	岐阜県立 多治見北高校	10月 29日	私立 南山高校男子部
		10月 28日	愛知県立 西尾高校	10月 20日	愛知県立 刈谷北高校	11月 9日	愛知県立 豊田西高校	11月 4日	名古屋市立 菊里高校
		11月 8日	愛知県立 江南高校	10月 25日	愛知県立 豊橋東高校	11月 10日	愛知県立 半田高校	11月 5日	岐阜県立 多治見北高校 (オンライン)
		11月 10日	愛知県立 豊田北高校	10月 25日	私立 南山高校男子部	11月 13日	愛知県立 江南高校	11月 6日	愛知県立 豊橋東高校
		11月 11日	名古屋市立 菊里高校	10月 27日	愛知県立 西尾高校	以下日付	名古屋市立 菊里高校	11月 11日	岐阜県立 岐阜北高校
		11月 16日	岐阜県立 岐阜北高校	11月 8日	岐阜県立 多治見北高校	不明	愛知県立 東郷高校	11月 11日	愛知県立 江南高校
		11月 16日	岐阜県立 多治見北高校	11月 10日	名古屋市立 菊里高校		私立クラーク記 念国際高校	11月 14日	愛知県立 豊田西高校
		11月 18日	愛知県立 豊田西高校	11月 14日	愛知県立 江南高校		名古屋大学教育 学部附属高校	12月 16日	福井県立 金津高校
		12月 20日	愛知県立 明和高校	11月 17日	愛知県立 豊田西高校		静岡県立 磐田南高校	以下 日付 不明	浜松市立高校
							愛知県立 明和高校		愛知県立 半田高校
									名古屋大学教育 学部附属高校

出典:文系教務課・広報体制委員会議事録・教育研究推進室

2. 研究の現況

2-1 研究の成果

資料2-1-1 教員の研究活動状況

	著書		招待論文数		査読付き	その他	
	日本語	外国語	日本語	外国語	日本語	外国語	その他
2020年度	40 (8)	13 (0)	33	3	19	29	203
2021年度	53 (3)	7 (1)	0	0	38	35	69
2022年度	33 (6)	17 (2)	22 (4)	14 (7)	17	24	
2023年度	20 (2)	6 (1)	24	13	14	25	71
2024年度	29 (5)	14 (2)	14	8	14	19	81

注:著書数については、内数(カッコ内)として「単著」の数を記載。

学会発表や「査読付き論文」に当たらない論文などについては、「その他」としてカウント。

「招待」かつ「査読付き」の場合は、「招待」でカウント。

カウントの基準の変更によって、例年と数値が異なる場合がある。

出典:教育研究推進室

資料2-1-2 国際/国内研究集会開催件数 (教員延べ件数)

	国際研究集会	国内研究集会
2020年度	12	29
2021年度	46	44
2022年度	15	45
2023年度	16	47
2024年度	23	47

出典:教育研究推進室

資料2-1-3 共同研究実施件数 (教員延べ件数)

経 費	授業料	科学研究費 補助金	名古屋大学 全学諸経費	人文学研究科 プロジェクト経費	その他
2020年度	2	37	0	1	17
2021年度	11	65	5	6	25
2022年度	0	89	4	3	24
2023年度	21	74	4	6	26
2024年度	25	66	10	7	22

資料2-1-4 海外における調査・フィールドワーク件数

実施国	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
アメリカ (マリアナ諸島を含む)	1 (1)		1	1	7 (4)
イギリス	4 (4)		24 (18)	24	128 (120)
イタリア				3	3
インドネシア				2	1
ウズベキスタン			4	3	1
エジプト				1	2
エチオピア	1 (1)	1		3	4
エルサルバドル					1
オーストラリア			1		
オーストリア		1		2	2
カメルーン	3 (3)				5 (5)
韓国				3	5
ギリシャ				1	1
キルギス			1	1	1
スウェーデン					1
スペイン	1 (1)		1		2
タイ					1
台湾			1	2	4
中国		6 (6)	8 (8)	10 (5)	10 (5)
ドイツ			1	4	3
トルコ				1	
フィリピン		1 (1)		2	5
フィンランド			1	1	1
ブラジル				1	
フランス	2 (2)	1 (1)	4	3	4 (1)
ベルギー					4 (4)
マレーシア				1	
メキシコ		1 (1)			1
ラオス				3	1
不明	1 (1)		24	3 (1)	1

注:()内はオンラインの内数

資料2-1-5 研究会実施回数

製田靖雄プロジェクト研究会 名古屋大学会話分析データセッション 「身体と記憶の共鳴」研究会 (2019年度より「予測を生み出す推論装置」研究会へ名称変更) 名古屋平安文学研究会 日本語教育研究集会 名古屋音声研究会 名古屋言語研究会 フェミニズム・ジェンダー読書会 1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究(国際シンポジウム含む) 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 家徴天皇制研究会 中国語文献を読む会(in 名古屋) 「訳官使・通信使とその周辺」研究会 「言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 レカーディング・語彙研究会 とお屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	12 10 1 2 1 1 5 4 4 1 1 3 10 2 1 1 1 1 1	12 2 1 4 4 1 4 3	10 10 11 1 4 1 4 3
「身体と記憶の共鳴」研究会 (2019年度より「予測を生み出す推論装置」研究会へ名称変更) 名古屋平安文学研究会 日本語教育研究集会 名古屋音声研究会 名古屋言語研究会 フェミニズム・ジェンダー読書会 1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究(国際シンポジウム含む) 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 象徴天皇制研究会 中国語文献を読む会(in 名古屋) 「訳官使・通信使とその周辺」研究会 「言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 レーディング・語彙研究会 と古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	1 2 1 1 5 4 4 1 1 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 1 4 4 1 4 3	1 4 1 1 4 3
(2019年度より「予測を生み出す推論装置」研究会へ名称変更) 名古屋平安文学研究会 名古屋音声研究会 名古屋言語研究会 名古屋言語研究会 フェミニズム・ジェンダー読書会 1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究(国際シンポジウム含む) 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 象徴天皇制研究会 中国語文献を読む会(in 名古屋) 訳官使・通信使とその周辺」研究会 言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	2 1 1 5 4 4 1 1 3 10 2 1 1 1 1	2 1 4 1 4 3	4 1 1 4 3
日本語教育研究集会 名古屋音声研究会 名古屋言語研究会 フェミニズム・ジェンダー読書会 1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究(国際シンポジウム含む) 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 象徴天皇制研究会 中国語文献を読む会(in 名古屋) 訳官使・通信使とその周辺」研究会 「言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	1 1 5 4 4 1 1 3 10 2 1 1 1	2 1 4 1 4 3	4 1 1 4 3
名古屋音声研究会 名古屋言語研究会 フェミニズム・ジェンダー読書会 1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究(国際シンポジウム含む) 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 象徴天皇制研究会 中国語文献を読む会(in 名古屋) 訳官使・通信使とその周辺」研究会 「言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	1 5 4 4 1 1 3 10 2 1 1 1	1 4 4 1 4 3 3	1 1 4 3
名古屋言語研究会 フェミニズム・ジェンダー読書会 1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究(国際シンポジウム含む) 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 教徴天皇制研究会 中国語文献を読む会(in 名古屋) 訳官使・通信使とその周辺」研究会 言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	5 4 4 1 1 3 10 2 1 1 1 1	1 4 4 1 4 3 3	1 1 4 3
フェミニズム・ジェンダー読書会 1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究(国際シンポジウム含む) 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 象徴天皇制研究会 中国語文献を読む会(in 名古屋) 訳官使・通信使とその周辺」研究会 「言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	4 4 1 1 1 3 10 2 1 1 1 1 1 1 1	4 4 1 4 3	1 1 4 3
930年代における東アジア女性雑誌の比較研究(国際シンポジウム含む) 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 象徴天皇制研究会 中国語文献を読む会(in 名古屋) 訳官使・通信使とその周辺」研究会 一言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	4 1 1 3 10 2 1 1 1	4 1 4 3	1 1 4 3
東アジアと同時代日本語文学フォーラム 象徴天皇制研究会 中国語文献を読む会 (in 名古屋) 訳官使・通信使とその周辺」研究会 言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	1 1 3 10 2 1 1 1	1 4 3	1 4 3
象徴天皇制研究会 中国語文献を読む会 (in 名古屋) 訳官使・通信使とその周辺」研究会 「言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	1 3 10 2 1 1 1	1	3
中国語文献を読む会 (in 名古屋) 訳官使・通信使とその周辺」研究会 言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	3 10 2 1 1 1	3	3
訳官使・通信使とその周辺」研究会 言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	10 2 1 1 1 1	1	
言説と情動」研究会 名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	2 1 1 1 1		1
名古屋哲学フォーラム リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	1 1 1 1		1
リーディング・語彙研究会 上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	1 1 1		1
上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会 アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	1		1
アコリス考古学プロジェクト 電算文学研究会	1		1
電算文学研究会		1	
	12		1
		1	7
日本ハーディ協会	1		1
ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム	1	1	1
西洋古代史インターユニヴァーシティ・ワークショップ	1		
上海財経大学・名古屋大学共同研究会	1		1
テキストの中の文法研究会	2	2	
Gender, economy and mobilities in the Upper Mekong region	1	2	
メコン川上流地域における宗教・経済・ジェンダー (Publication planning meeting 含む)	1		1
日韓学術交流会	1		1
東アジア日本学研究国際シンポジウム	1	1	1
玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本	1	1	1
学僧慈円学会	1		
ナー ディー・ディー アン・ディー ディー・ディー ディー・ディー ディー・ディー ディー・ディー ディー・ディー ディー・ディー アン・ディー アン・	1		
た導的人社研	1		
会話分析研究(発表)会		1	1
おおりますがいのか、(光表) 云 名古屋大学最先端国際研究ユニット報告会	1	1	1
	1		1
日本認知言語学会チュートリアル	1		
東海縄文研究会	1		
名古屋大学人文学研究科英語学分野公開講演会	1		
名古屋大学人文学研究科文献思想学繋西洋古典学セミナー	1	1	
ELO Conference 2022	1		
映画プロデューサー渡邉一孝トーク	1		
中国における仏教怪異故事の流通	1		
中国・マンガ・メディア研究会	1	2	
Reimagining the Buddhist Landscape of Ancient Rajagrha/ Rajgir	1		

学会・研究会の名称	2022年度	2023年度	2024年度
ヴェセル・クルル教授/ヨシネ・ブロク教授講演会	1		
イラッド・マルキン教授講演会	1		
Workshop on Typology of Ideophones	1		
Atelier Cinematographique	1		
YLC 共同研究助成月例研究会	9		
名古屋大學一屏東大學・文學交流暨論文發表會	1	1	1
建国初期中国を移動する身体メディア・プロパガンダー戦時期からの継承と展開	1		
労働と身体の大衆文化論―戦時下・戦後の接続の試論として	3		
International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammer	1		
会話分析セミナー	1		1
学術知プロジェクト研究会	15		1
「予測と創発―理知と感情の人文学」刊行記念シンポジウム	1		
人文知共創センター設立記念シンポジウム	1		
Making Micro-Anarchic Voices: Questioning Body, Sexuality, and State Power with Moving Images	1		
Ezra Pound International Conference	1		
Screen and Energy Symposium	1		
ケアの倫理と人文学	1		
現代の第一線の研究者による古代哲学講演	4	1	
名古屋大学国語国文学会		1	1
名古屋大学東洋史研究会大会・例会		2	2
超域文化社会センター(国際)シンポジウム		1	1
名古屋歴史科学研究会(愛知県歴史教育者協議会との合同例会を含む)		1	3
International Conference of the European association for Japanese Studies (EAJS), panel		1	
考古学研究会(東海例会)		1	3
Workshop on the problems concerning Getica		1	
ヴァルター・ポール氏・ヘルムート・ライミッツ氏講演会		1	
International Joint Conference on Social Studies and Humanities		1	
Matteo Compareti 教授講演会		1	
ウズベキスタンの考古遺物の保存と活用に向けた取り組み		1	
アントレプレナーの倫理ワークショップ		1	
西洋古代哲学キャリアワークショップ		1	
AI で切り拓く人文学の未来		1	
古代哲学研究ネットワーク(サマースクール含む)		2	1
名古屋日韓平和ワークショップ		1	
日本西洋史学会(小シンポジウム含む)		3	
貫戦期の東アジアにおける映画と諸芸術		1	
名古屋大学・木浦大学校院生研究集会		1	
"Ideophones in Motion Description" Workshop		1	
近現代史研究会		1	
森野旧薬園春期展覧会		1	
Kyoto University Ancient Seminar		1	
歴史フェス(名古屋大学)		1	
中部地区英語教育学会愛知地区大会		1	1
What About China? 上映会		1	
Anthropocene Calling-Human, Philosophy, Technology, and Arts in the Age of Anthropocene		1	

学会・研究会の名称	2022年度	2023年度	2024年度
AAA プロジェクト全体研究集会		2	
An Afternoon with Trinh T. Minh-ha		1	
データサイエンス時代の言語教育第4回		1	
日中社会学会第35回大会シンポジウム		1	
Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World, The Past in the Present		1	
日本西洋古典学会フォーラム		1	
Sarah McGrath 講演会		1	
名古屋大学応用哲学・応用倫理学講演会		1	2
豊秋奨学会研究助成費に基づく国際研究集会		1	
中国現代史研究会東海例会		3	3
ドイツ語圏文化学講演会		1	
中世史研究会			4
日本フランス語フランス文学会中部支部			1
上海大学・名古屋大学学術交流会			1
東アジア日本学研究シンポジウム			1
帝国、移民、記憶			1
CHT シンポジウム			1
名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センター各種イベント			4
プロソディー研究シンポジウム			1
美濃の新たな7世紀像の構築に向けて			1
辻佐保子美術史学振興基金・講演会			1
日本イギリス哲学会関西部会			2
"Das dritte Reich" in der modernen deutschsprachigen Literatur und Philosophie. Entstehung, Entwicklung, Transformation			1
名古屋英語学会			1
日本英語学会第42回大会			1
すべてのものとダンスを踊って一共感のエコロジー			1
同志社大学古典教材開発研究センター研究(集)会			2
和歌文学会特別例会			1
イチからはじめる TEI 入門講座			1
チベット仏教研究会			1
プラジュニャーカラグプタ科研研究会			2
PLATO and GODS International Plato Society 4th Asia Regional Meeting			1
ヴォイスの通時的対照言語学的考察研究会			2
FS ダイアローグ			1
シリル・ルミュー講演会と討論			1
大須学ワークショップ			1
検閲・脱植民地化・自由			1
大須文庫調査研究報告会			1
人文学研究科院生主催イベント			2
日本メディア学会理論研究部会			1
国際シンポジウム×芸術実践			1
書評・講演会 舞踊と東アジアのモダニズム―日中舞踊交流史の視点から			1
ことばへの心理言語学的アプローチ			3

注:2025年度より、過去3年度分の掲載とする

2-2 研究資金の状況

資料2-2-1 科学研究費等受入状況

			新規採択	継続採択	合 計
	件	数	18件 (うち基盤S:0件 基盤A:1件)	57件 (うち基盤 S:0件 基盤 A:2件)	75件 (うち基盤S:0件 基盤A:3件)
2020年度		直接経費	28,200,000円	67,831,555円	96,031,555円
	受入金額	間接経費	8,460,000円	19,296,000円	27,756,000円
		合 計	36,660,000円	87,127,555円	123,787,555円
	件	数	19件 (うち基盤S:0件 基盤A:0件)	44件 (うち基盤 S:0 件 基盤 A:3 件)	63件 (うち基盤S:0件 基盤A:3件)
2021年度		直接経費	21,000,000円	72,142,160円	93,142,160円
	受入金額	間接経費	5,400,000円	21,351,000円	26,751,000円
		合 計	26,400,000円	93,493,160円	119,893,160円
	件	数	14件 (うち基盤 S:0件 基盤 A:0件)	50件 (うち基盤 S:0件 基盤 A:2件)	64件 (うち基盤 S:0件 基盤 A:2件)
2022年度		直接経費	13,500,000円	63,275,699円	76,775,699円
	受入金額	間接経費	4,050,000円	18,849,000円	22,899,000円
		合 計	17,550,000円	82,124,699円	99,674,699円
	件	数	19件 (うち基盤S:0件 基盤A:1件)	47件 (うち基盤 S:0件 基盤 A:1件)	66件 (うち基盤S:0件 基盤A:2件)
2023年度		直接経費	34,700,000円	48,042,442円	82,742,442円
	受入金額	間接経費	10,410,000円	11,580,000円	21,990,000円
		合 計	45,110,000円	59,622,442円	104,732,442円
	件	数	23件 (うち基盤 S:0件 基盤 A:1件)	33件 (うち基盤S:0件 基盤A:1件)	66件 (うち基盤 S:0件 基盤 A:2件)
2024年度		直接経費	49,717,387円	31,385,747円	81,103,134円
	受入金額	間接経費	14,820,000円	8,700,000円	23,520,000円
		合 計	64,537,387円	40,085,747円	104,623,134円

出典:研究事業課

資料2-2-2 寄付金等受入状況(2024年度)

2024年度

種 別	課題名	出 所	代表者	受入金額
寄付金		公益財団法人電気通信普及財団	梶原 義実	2,000,000円
寄付金		公益財団法人大幸財団	藤木 秀朗	100,000円
寄付金		公益財団法人萩原学術振興財団	岩田 直也	3,000,000円
寄付金		名古屋大学全学同窓会	河西 秀哉	350,000円
寄付金		樋口 諒(公益財団法人鹿島学術振 興財団)	樋口 諒	1,800,000円
寄付金		公益財団法人大幸財団	岩田 直也	200,000円
寄付金		鄭 弯弯(公益財団法人大林財団)	ZHENG Wanwan	1,200,000円
寄付金		南山大学(公益財団法人たばこ総合 研究センター)	吉田 早悠里	300,000円
寄付金		公益財団法人村田学術振興・教育財 団	李 乃琦	800,000円
寄付金		公益財団法人村田学術振興・教育財 団	樋口 諒	450,000円
寄付金		岩田直也 (公益財団法人三菱財団)	岩田 直也	3,900,000円
寄付金		李 乃琦(公益信託田島毓堂語彙研 究基金)	李 乃琦	250,000円
寄付金		李 乃琦 (一般財団法人仏教学術振 興会)	李 乃琦	300,000円
寄付金		公益財団法人豊秋奨学会	河西 秀哉	1,100,000円
寄付金		公益財団法人りそなアジア・オセア ニア財団	日比 嘉高	540,000円
共同研究	大規模言語モデル等を利用した近代文 芸テキストデータ解析法の探求	大学共同利用機関法人人間文化研究 機構国文学研究資料館	日比 嘉高	2,380,000円
受託事業	「国際日本研究」コンソーシアム事業	大学共同利用機関法人人間文化研究 機構 国際日本文化研究センター	GRUNOW Tristan Robert	189,400円
受託研究	課題設定による先導的人文学・社会科 学研究推進事業(学術知共創プログラム)	独立行政法人日本学術振興会	中村 靖子	15,142,400円
補助金	次世代研究者挑戦的研究プログラム助 成事業	国立研究開発法人科学技術振興機構 (学内配分)	呂 政慧 外46件	12,978,190円
補助金	科学技術人材育成費補助金(T-GEx 育成対象者スタートアップ研究費)	文部科学省(学内配分)	樋口 諒 外1名	3,800,000円
補助金	人工知能等社会実装研究拠点事業費補 助金(オープンアクセス加速化事業)	文部科学省(学内配分)	鄭 弯弯 外2件	1,129,616円
補助金	科学技術人材育成費補助金(ダイバー シティ研究環境実現イニシアティブ)	文部科学省(学内配分)	中川 朋美 外2件	8,000,000円

注:寄附金は、財務課作成『R6年度寄附金受入等一覧』より人文学研究科分を抽出(2024年度中に入金のあったもののみ) 受託事業・受託研究等は、外部資金データより人文学研究科分を抽出し、学内分担分を含まない

科研費は、プロジェクト受入状況照会より人文学研究科分・高等研究院(人)を抽出

出典:研究事業課

資料2-2-3 人文学研究科教育実施経費配分状況(2024年度)

プロジェクト名	代表者	配分額
美術史実習1a/2a および美術史実習1b/2b	美学美術史学	107,560円
考古博物館実習Ⅱ・考古学実習Ⅲ	考古学	342,000円
日本史博物館実習 I	日本史学	34,920円
文化資源学研究 I	歴史文化学繋共通	58,320円
文化資源学研究Ⅲ	歴史文化学繋共通	58,320円
文化人類学実習 I a	文化人類学	194,580円
文化人類学実習Ib	文化人類学	303,080円
文化人類学入門実習 I	文化人類学	67,620円

出典: 文系総務課

資料2-2-4 人文学研究科プロジェクト経費配分状況 (2024年度)

プロジェクト名	代表者	配分額
日中言語文化研究推進プロジェクト	杉村 泰	400,000円
第11回 名古屋大学・台湾大学 大学院生研究発表会	飯田 祐子	124,000円
連続ワークショップ:データに基づいた統計・機械学習モデルの基礎と応用	鄭 弯弯	400,000円
第10回日韓学術交流会	宇都木 昭	400,000円
真福寺大須文庫のアーカイヴ創成プロジェクト―今後の宗教遺産テクスト学の発展に向けて	郭 佳寧	400,000円

出典: 文系総務課

2-3 研究成果の社会還元

資料2-3-1 社会還元活動実施状況

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
市民向け講演・公開シンポジウム、カルチャースクール等	57	75	60	14	34
新聞記事の掲載・テレビ出演等	48	24	34	75	62
高等学校への出張授業等	5	16	22	16	20
その他	20	4	6	28	46

注:カウントの基準の変更によって、例年と数値が異なる場合がある。

資料2-3-2 地域連携活動一覧

	種別	内 容
2020年度	自治体史等	愛知県史、知立市史、西尾市史(4件)、豊田市史、新修豊田市史(2件)、小松市史、新 修鳥取市史、明石市史
	文化財調査事業等	愛知県、名古屋市、岡崎市 (2件)、稲沢市 (2件)、豊田市、豊川市 (2件)、一宮市、あま市、 岐阜県垂井町・白川町・大垣市 (2件)、福島県只見町・金山町、長野県阿智村・飯田市
	博物館美術館等	名古屋市博物館(2件)、特別史跡名古屋城、愛知県埋蔵文化センター、西尾市岩瀬文庫、 国立歴史民俗博物館(2件)、静岡県立美術館、三重県立美術館、大学共同利用機関法人国 文学研究資料館、花祭会館、ハーバード美術館(アメリカ)〈三井記念美術館、名古屋市美 術館、岡崎市美術博物館、名古屋市教育委員会〉
	その他団体	名古屋テレビ、大須観音真福寺、大須商工会議所、特定非営利活動法人名古屋難民支援室、 中部日本ミツバチの会、一般財団法人日ロ友好愛知の会、サントリー文化財団、国立女性 教育会館、公益財団法人東海ジェンダー研究所
2021年度	自治体(自治体史· 文化財調査事業等)	名古屋市、豊田市 (3件)、一宮市、犬山市、知立市、西尾市 (3件)、豊川市、岐阜県、 大垣市、石川県、小松市、鳥取市、明石市、福島県只見町・金山町
	博物館美術館等	名古屋市博物館、大須観音真福寺宝生院文庫、愛知県公文書館、愛知県埋蔵文化センター、愛知芸術文化センター、岩瀬文庫、豊田市美術館、史跡大曲輪貝塚、稲沢市荻須記念美術館、国立歴史民俗博物館、静岡県立美術館、三重県立美術館、平洲記念館、ハーバード美術館(アメリカ)〈都城市博物館、高岡市美術館、福井県立美術館、一宮市博物館〉
	その他団体	名古屋テレビ、大須商工会議所、特定非営利活動法人名古屋難民支援室、日ロ交流愛知の会、 国立女性教育会館、公益財団法人東海ジェンダー研究所、東京都港区立男女平等参画セン ター、文化遺産国際協力コンソーシアム (3件)、長野県白馬村観光局
2022年度	自治体(自治体史・ 文化財調査事業・そ の他)	愛知県(4件)、豊川市(3件)、犬山市(2件)、豊田市、稲沢市、西尾市、岐阜県中津川市、大垣市(3件)、関ケ原町、垂井町、石川県小松市、かほく市、兵庫県姫路市、明石市
	博物館美術館等	名古屋市博物館 (3件)、特別史跡名古屋城、東栄町花祭会館、岩瀬文庫、史跡大曲輪貝塚、奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所〈徳島県立美術館、府中市美術館、四日市市立博物館、岐阜県文化財センター、小牧市教育委員会、大阪城天守閣、沼田市歴史資料館、石水博物館 (津市)〉
	その他団体	名古屋難民支援弁護団、花祭の未来を考える実行委員会、日ロ友好愛知の会、公益財団法 人東海ジェンダー研究所、国立女性教育会館
2023年度	自治体(自治体史・ 文化財調査事業・そ の他)	名古屋市(2件)、愛知県(2件)、豊川市(2件)、犬山市(2件)、豊田市、一宮市、稲沢市、西尾市(2件)、岐阜県、大垣市、土岐市、関ケ原町、坂祝町、香川県、岡山県、福岡県、筑紫野市、高知県、石川県野々市市、兵庫県明石市、〈名古屋市(2名)、愛知県(5名)、一宮市、岡崎市、岩倉市、幸田町、岐阜県、岐阜市、養老町、静岡県(2名)、徳島県、京都府福知山市〉
	博物館美術館等	名古屋市博物館、特別史跡名古屋城、愛知県埋蔵文化センター、愛知県芸術劇場、愛知県 公文書館、東栄町花祭会館、国会図書館、奈良県立橿原考古学研究所、国立民族博物館、 古代オリエント博物館、東洋文庫〈名古屋市美術館、愛知県美術館、野外民族博物館リト ルワールド、安曇野ちひろ美術館、長浜市曳山博物館、岐阜県文化財センター
	その他団体	名古屋難民支援室、日ロ友好愛知の会、公益財団法人東海ジェンダー研究所、Common-S サカエ大学、ZIP-FM、NHK、国立女性教育会館、出版文化産業振興財団、一般社団法人 Glocal Academy、東京弁護士会
2024年度	自治体(自治体史・ 文化財調査事業・そ の他)	名古屋市(3件)、愛知県(3件)、豊川市(2件)、犬山市(2件)一宮市、稲沢市、西尾市、小牧市、東栄町、岐阜県(2件)、大垣市(3件)、飛騨市、三重県亀山市、いなべ市、石川県野々市市、兵庫県明石市、京都府、静岡市〈名古屋市(2名)、愛知県(3名)、一宮市、富山県、福井県〉
	博物館美術館等	特別史跡名古屋城跡、愛知県埋蔵文化センター、愛知県芸術劇場、東栄町花祭会館、奈良県立橿原考古学研究所、国立民族学博物館、東京文化財研究所〈名古屋市美術館、桑山美術館、金沢21世紀美術館、静岡市美術館、大阪府堺市〉
	その他団体	一般社団法人日ロ友好愛知の会、公益財団法人東海ジェンダー研究所、ZIP-FM、国立女性教育会館、東海テレビ、名鉄国際育英会、出雲殿財団、文化遺産国際協力コンソーシアム、2026あいち名古屋アジア・アジアパラ大会、厚生労働省

注:博物館美術館等の〈 〉内は、学芸員等の就職先を示す(臨時職員・現職リカレント教育を含む)

自治体の〈 〉内は、自治体職員の就職先を示す

編集委員

秋 田 喜 美

崔 境 眞 (教育研究推進室幹事〈後期〉)

梶原義実 (副研究科長)

川 本 悠紀子

ミギー ディラン

三 輪 晃 司

長 山 智香子

小川翔太(教育研究推進室幹事〈前期〉)

佐 野 誠 子

吉 田 早悠里

(アルファベット順)

年報2024 名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

2025年10月15日発行

発行 名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL (052)747-6391

組版 株式会社 あるむ

〒460-0012 名古屋市中区千代田3-1-12 TEL (052)332-0861